

令和4年度 琉球大学 SDGsに関する教職員・学生 アンケート調査報告書



University of the Ryukyus

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



琉球大学は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。

琉球大学 SDGs 推進室

目次

調査概要	1
【教員・職員】	
回答者の基本属性	2
SDGs の理解度	3
課題解決の取組み	8
重点的に取組むべき目標	14
教員の SDGs との関わり	18
今後の SDGs の取組みに関する意見	22
取組事例 –研究 WG の取組み–	25
取組事例 –教育 WG の取組み–	26
【学部学生】	
回答者の基本属性	27
SDGs の理解度	28
課題解決の取組み	30
【大学院学生】	
回答者の基本属性	34
SDGs の理解度	35
課題解決の取組み	37
まとめ	41

調査概要

1. 調査の目的

- SDGs 持続可能な開発目標への取組みについて、教職員及び学生の理解、考えや実践等のアンケートを行うことで、本学での SDGs 活動のチェックを行い、改善しながら SDGs 達成に貢献することを目的としています。

2. 調査方法

- 調査方法
教職員及び学生（学部学生・大学院学生）を対象に、Web 形式によるアンケートを実施しました。

3. 回収結果

- 調査実施日
2022 年 11 月 8 日～11 月 25 日（教職員）
- 教員（常勤・非常勤：回答者数 194 人）
- 職員（常勤・非常勤：回答者数 341 人）
- 調査実施日
学部学生 2022 年 9 月 26 日～10 月 31 日
大学院学生 2022 年 9 月 26 日～10 月 17 日
- 学部学生（回答者数 3,706 人）
- 大学院学生（回答者数 642 人）

●SDGs（持続可能な開発目標）とは・・・

すべての人々にとってよりよい、より持続可能な未来を築くための青写真です。貧困や不平等、気候変動、環境劣化、繁栄、平和と公正など、私たちが直面するグローバルな諸課題の解決を目指します。SDGs の目標は相互に関連しています。誰一人置き去りにしないために、2030 年までに各目標・ターゲットを達成することが重要です。

【出典：国際連合広報センター】

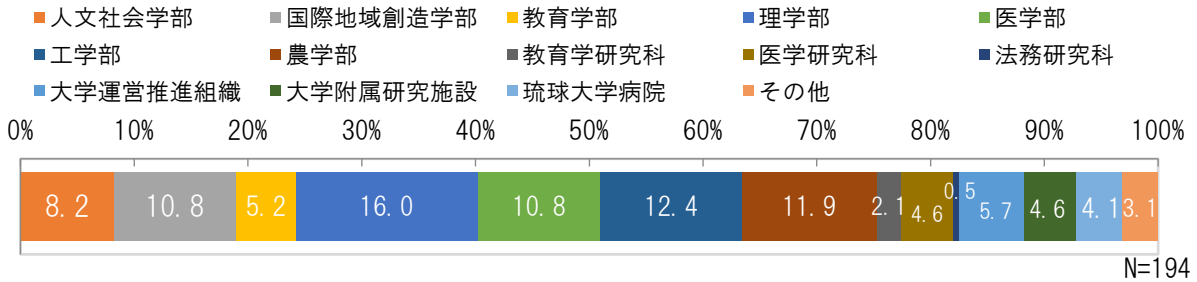
本学では、第 4 期中期目標・中期計画において、教育・研究等活動における SDGs の取組みの推進と島嶼地域の課題解決に向けた多様なステークホルダーとの連携・協働を掲げており、これらをスムーズに進めていくためには、何よりも教職員及び学生の SDGs に関する意識啓発（自分ごと化）と自発的アクションを促していくことが求められます。

回答者の基本属性

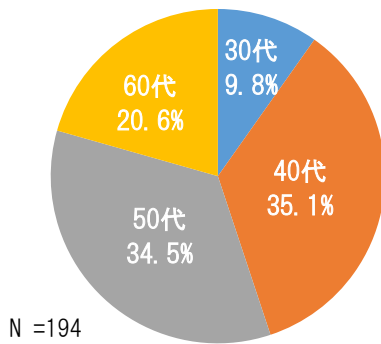
教員・職員

教員・職員について

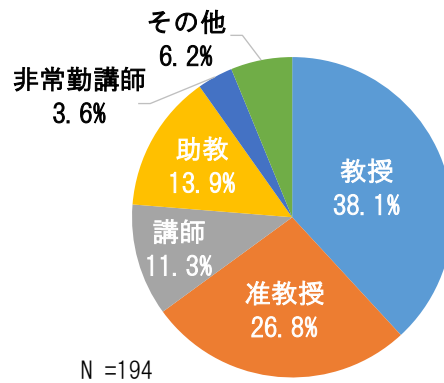
教員の属性



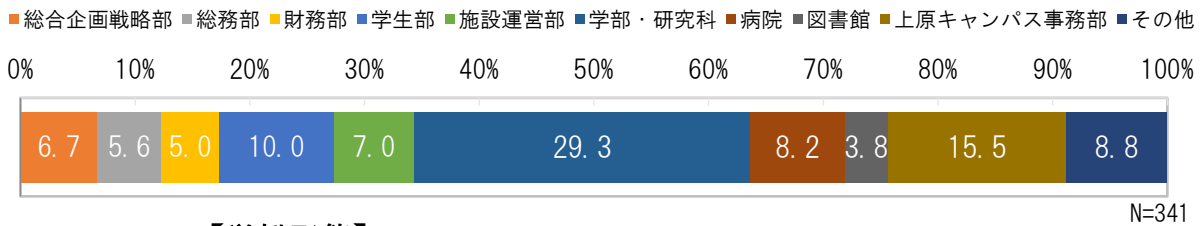
【年代】



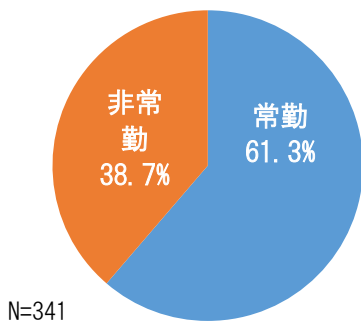
【職名】



職員の属性



【労働形態】



SDGs の理解度

教員・職員

SDGs の理解度は教員が 8 割と高い

● 設問：SDGs（持続可能な開発目標）の理解度

SDGs の理解度は、教員が「内容を理解し、アクションを行っている」が 56.2%に対し職員は 34.6%と、理解し実践している割合に 21.6 ポイントの開きがあります。教員は講義等で実践の機会があるものの、職員について実際の行動に結びつけられるような取組みを展開していくことが重要です。

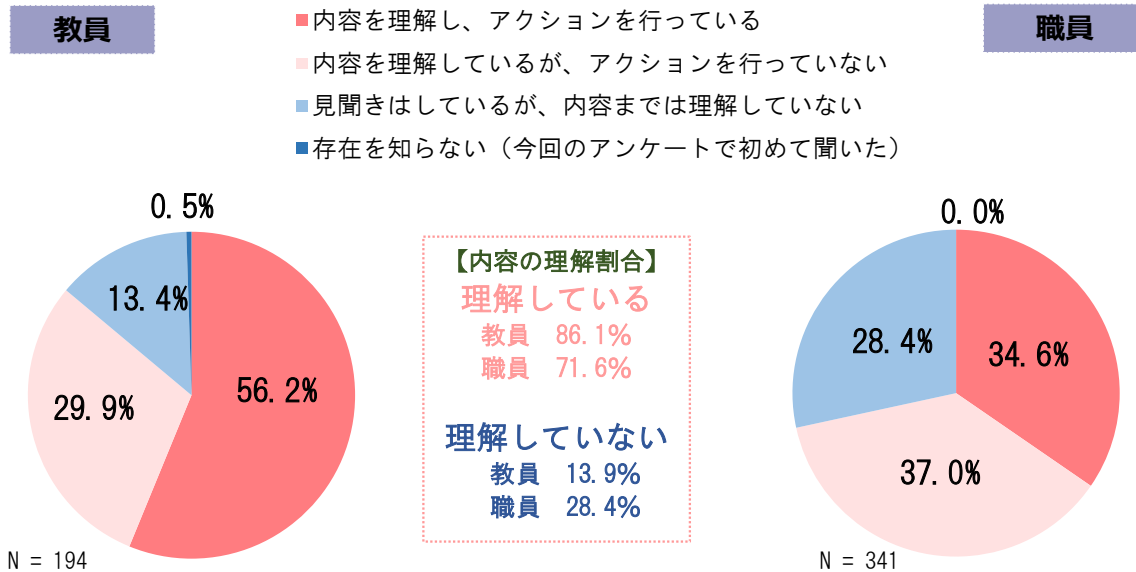


図1 SDGs の理解度

教員の SDGs の理解度は、職位別では、「講師」の 95.4%が内容の理解をしており、「准教授」は 88.5%です。一方、「助教」では内容まで理解していない/存在を知らないが 22.2%と他の職位より理解度が低くなっています。

所属部別では、「内容まで理解していない/存在を知らない」が「琉球大学病院」で 37.5%、「理学部」で 25.8%と高くなっています。一方、内容の理解は「農学部」「教育学研究科」で 100%と所属により理解度に差があります。

教員の約 9 割が理解をしていることから、研究テーマと SDGs の目標やターゲットとを結びつけるなどの工夫で、既に SDGs の取組みを行っている「気づき」につながることも考えられます。

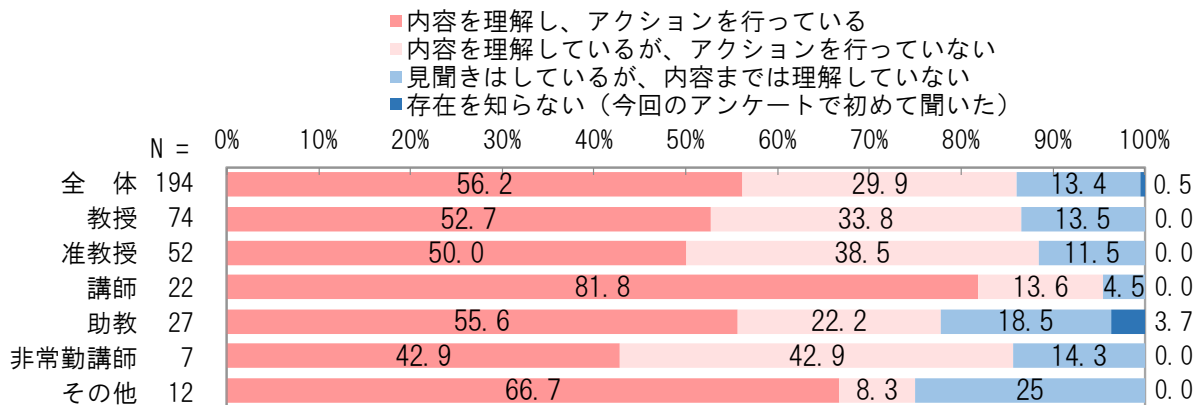


図2 教員・職位別 SDGs の理解度

教員

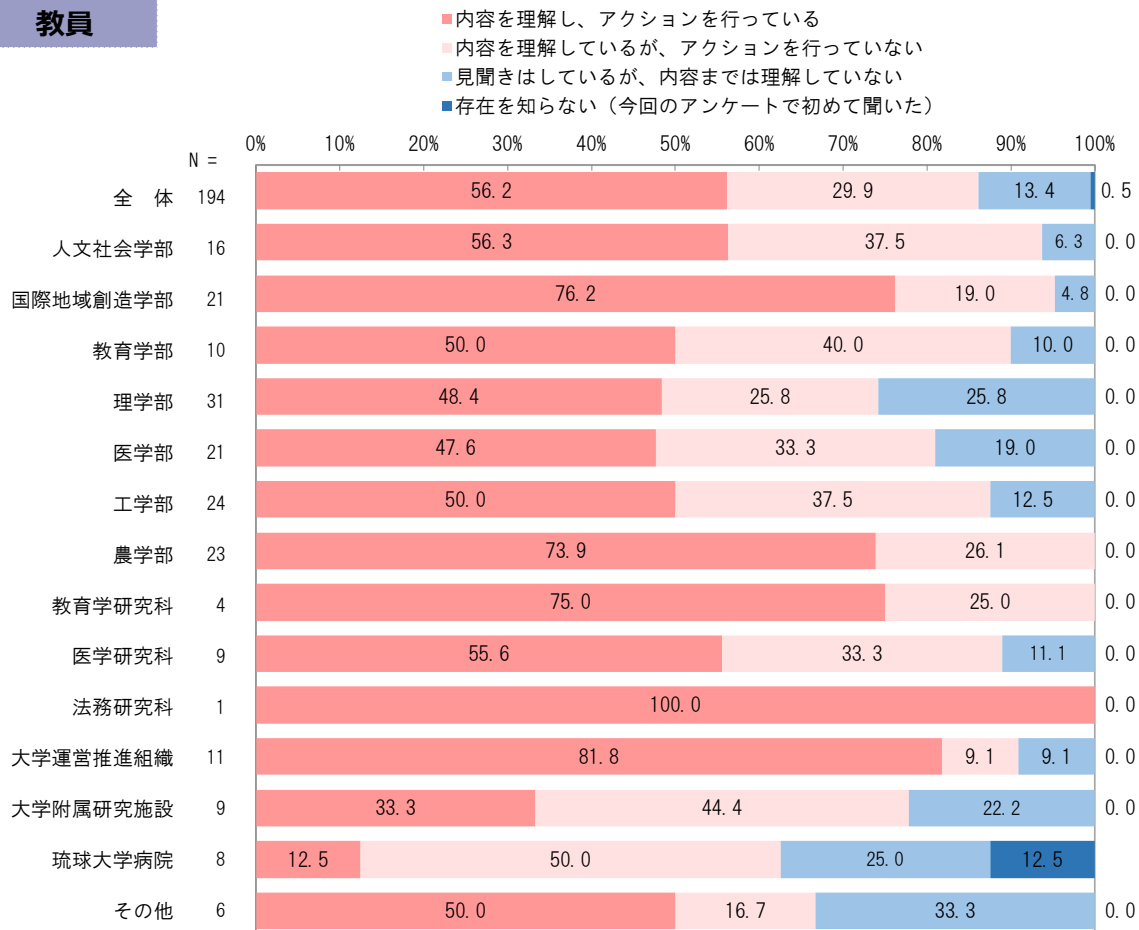


図3 教員・所属別 SDGs の理解度

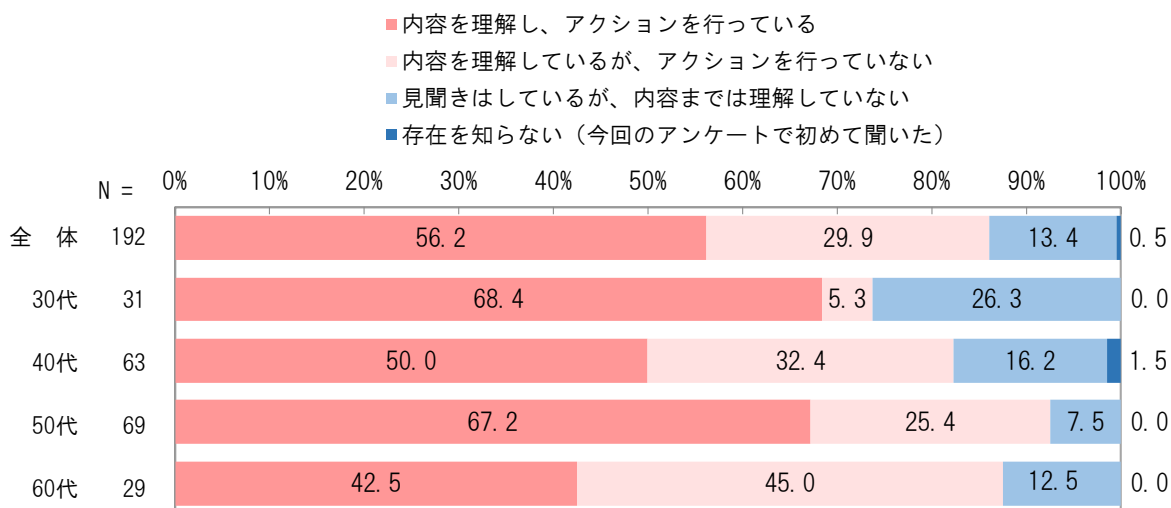


図4 教員・年代別 SDGs の理解度

職員の SDGs の理解度は、所属別で、「総務部」が「内容を理解し、アクションを行っている」が 57.9%、次いで「図書館」と 53.8%と続きます。内容の理解は、「図書館」が 92.3%、「財務部」が 88.2%と高い理解度です。

「内容まで理解していない/存在を知らない」が「上原キャンパス事務局」で 37.3%となっており、「学部・研究科」が 36.0%と続きます。

労働形態別では、「内容を理解し、アクションを行っている」が「常勤」は 33.5%、「非常勤」は 36.4%です。一方で、「内容まで理解していない」が「非常勤」は 31.8%と「常勤」より 5.5 ポイント高く、理解が低くなっています。

職員は、大学本部と学部等との間で理解度に差が見られるため、学部等の職員が理解を深められるよう、学部等の業務との関連付けた SDGs への意識啓発の取組みが必要と思われます。

事務局の理解度が低いことから現場部門に向けたワークショップの実施等での機会なども重要と考えます。

職員

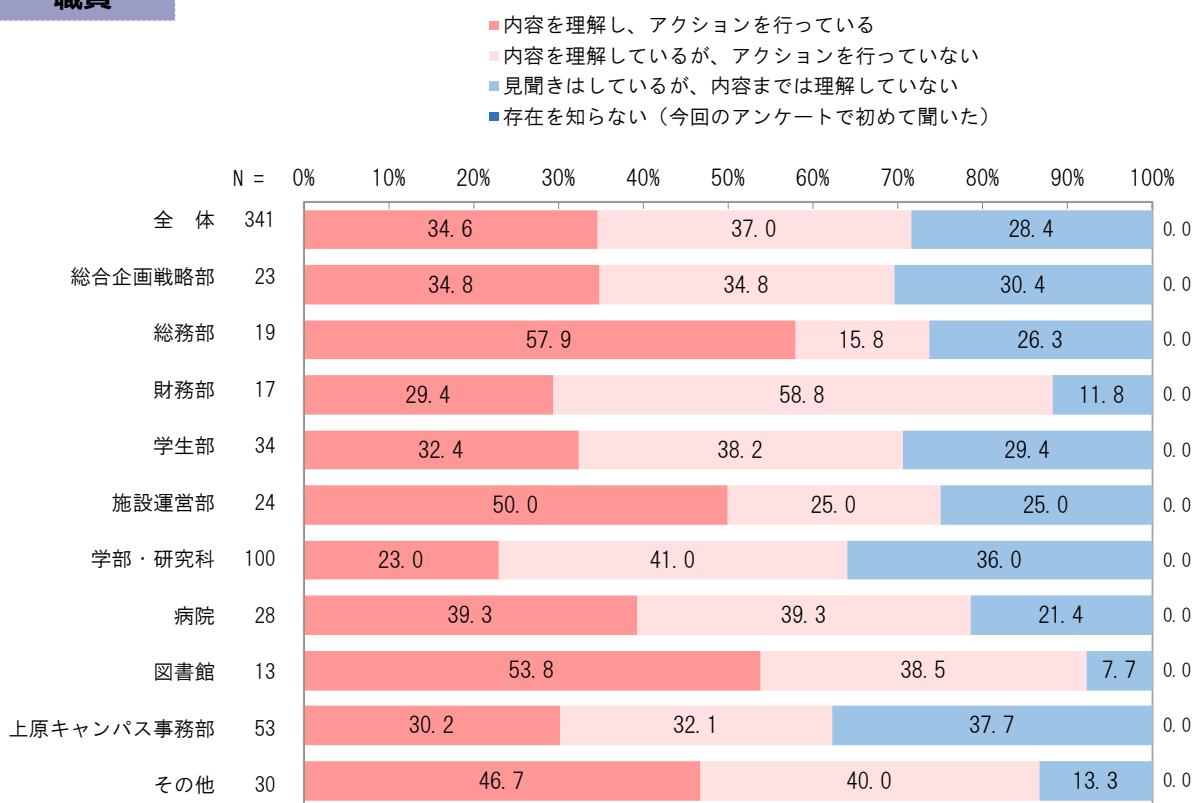


図5 職員・所属別 SDGs の理解度

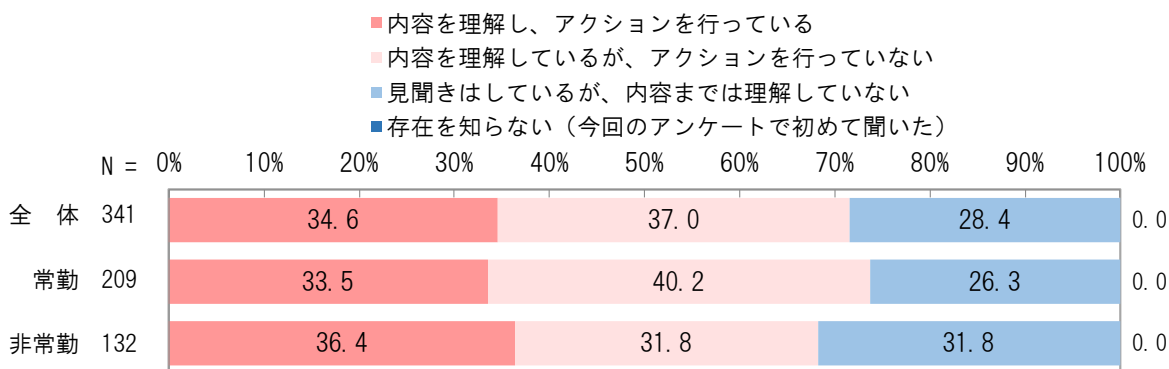


図6 職員・労働形態別 SDGs の理解度

● 設問：SDGsの理解度×業務または日常生活を通じた社会課題解決の取組み

教員では、「内容を理解し、アクションを行っている」の9割が業務や日常生活で取組みを実践しており、「内容を理解していない」の7割は「未定」の回答です。職員についても「内容を理解し、アクションを行っている」の8割が業務や日常生活で取組みを実践しています。

「内容まで理解していない」の「未定」の割合が高く、教員は7割、職員は4割です。「未定」の回答者の理由について今後深掘りし、アクションに繋がる示唆が得られるFDやSD活動が必要です。

教員

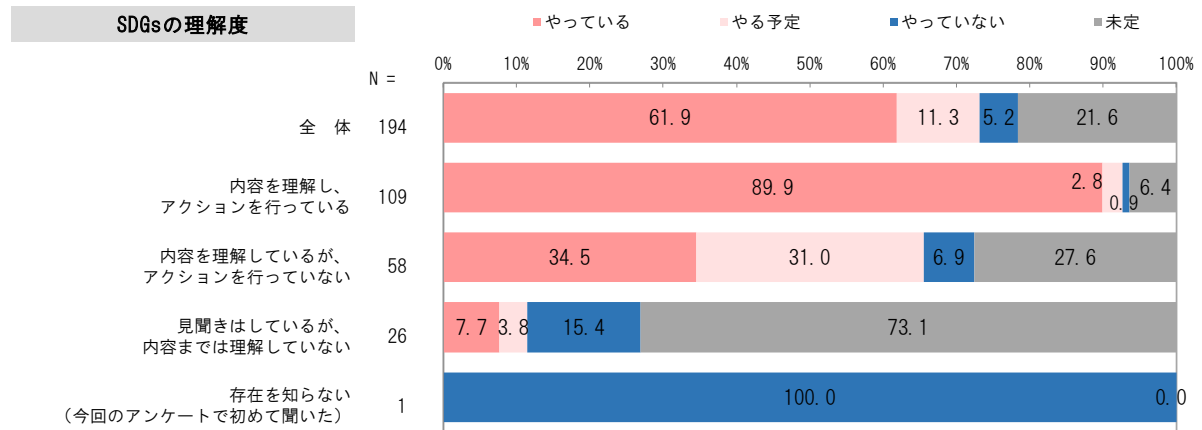


図7 教員・業務/日常の取組状況×SDGsの理解度

職員

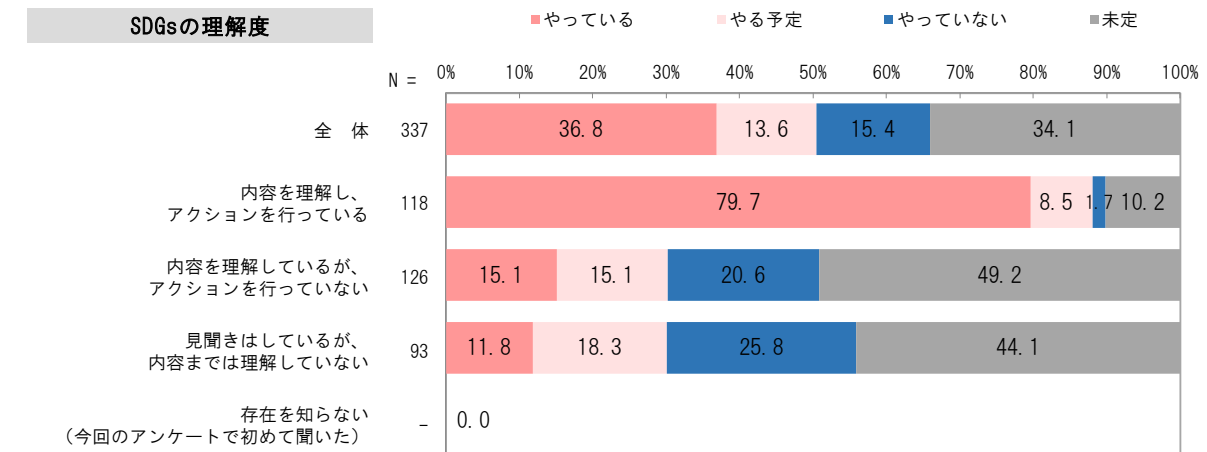


図8 職員・業務/日常の取組状況×SDGsの理解度

●設問：SDGsの理解度×SDGsの目標に合わせた自身の取組みの紐づけ

教員では、「内容を理解し、アクションを行っている」の8割以上が自身の取組みと紐づけていると回答、「内容まで理解していない」の7割強は、今後の取組みは「未定」の回答です。

職員も「内容を理解し、アクションを行っている」の6割が自身の取組みと紐づけて実践しています。「内容まで理解していない」の4割が自身の取組みと紐づけた実践ができていないことがうかがえます。

教員の「未定」の割合が高く、学内や日常生活においてSDGsの掲げているゴールとターゲットについて関わりを見出すことが出来ていません。実例など広報や周知などの方策を講じることで、自身の生活と紐づいているという発見があると思われます。

教員

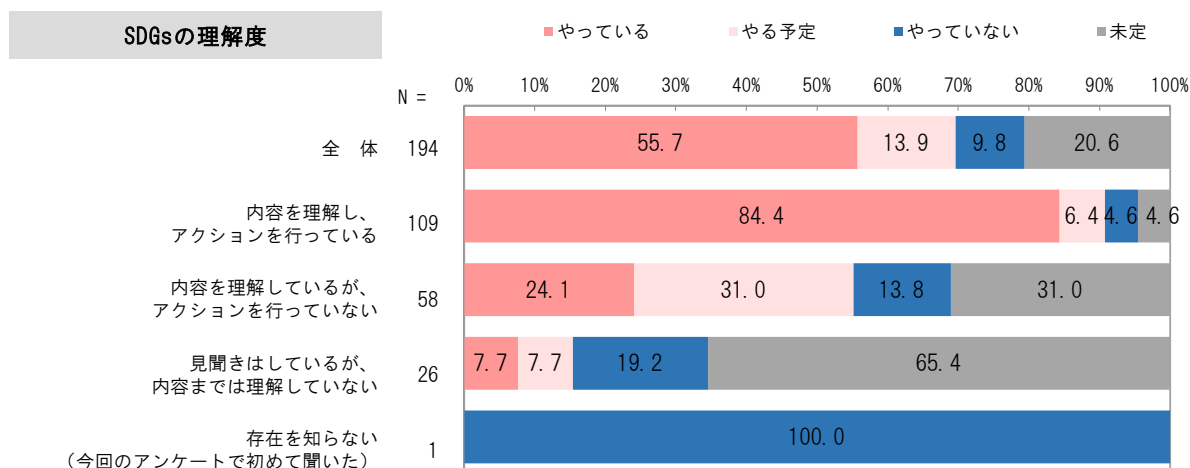


図9 教員・SDGsの目標に合わせた自身の取組み×SDGsの理解度

職員

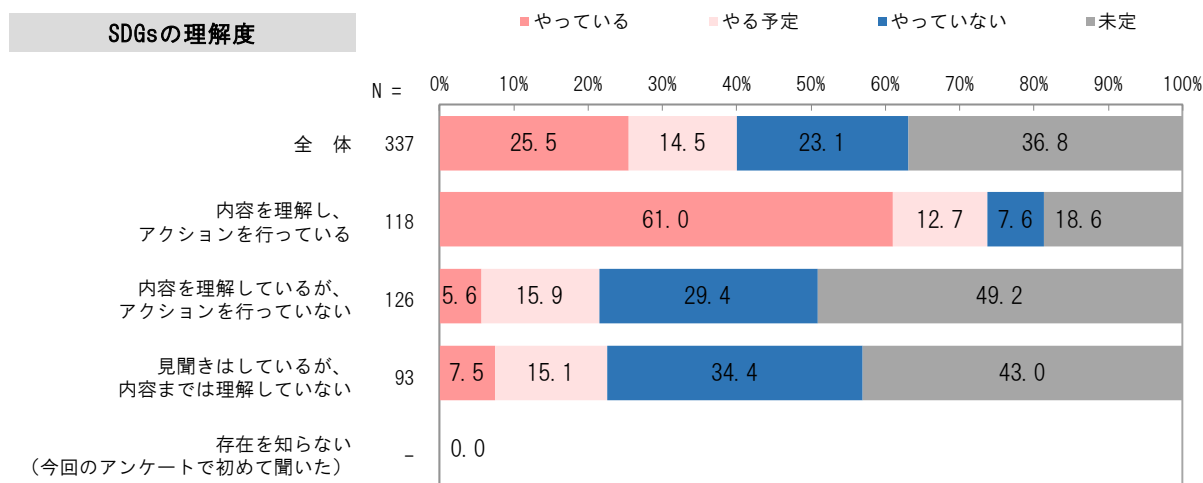


図10 職員・SDGsの目標に合わせた自身の取組み×SDGsの理解度

取組みは重要だが、日々の生活の優先度の方が高い

● 設問：SDGs の印象について

職員では「取組みは重要と考えるが、日々の生活に比べると、優先度は下がる」が6割で半数以上です。また「目新しさはなく、すでに自分で取り組んでいるものである」が20.8%とSDGsが日常に浸透していることもうかがえます。

SDGsを理解していることで、日々の生活の中での取組みとSDGsの繋がりが分かる職員が一定数いることが分かります。少数ですが3%が知らない/自分には関係がないと回答しており、SDGsの方針である「誰一人置き去りにしない」ことが日常生活の事柄と関連しやすいことを確認できる機会を作る必要があると思われまます。

職員

- そもそも知らない
- 自分にはあまり関係がない
- 取組みは重要と考えるが、日々の生活に比べると、優先度は下がる
- 目新しさはなく、すでに自分で取り組んでいるものである
- 取り組むことで周りから褒められる等、自らのブランディングでのメリットが期待される
- その他

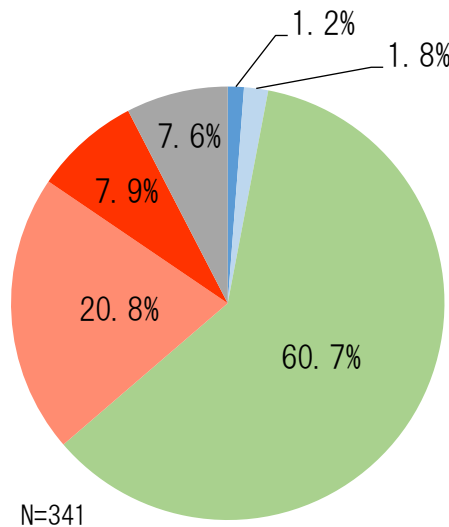


図11 SDGs（持続可能な開発目標）の印象

●設問：SDGsを知った経緯について

SDGsを知るに至った経緯については、教員、職員ともに「テレビ、インターネット、新聞、雑誌などのメディア」が9割程となっています。

2015年9月の国連サミットでSDGsが採択されて以降、日本でも日本版SDGsとして2016年12月に「SDGs実施指針」が決定され、日本の「SDGsのモデル」の確立に向けた取組みが進められています。

国、地方公共団体及び企業など多様なステークホルダーと連携した取組みが、テレビや新聞等でも頻繁に取り上げられるようになりました。大学でもアカデミックの立場から産官学民が協働しながらSDGsを考え、知の実践の取組みなど広がりを見せています。

教員

職員

- テレビ、インターネット、新聞、ラジオ、雑誌などのメディア
- 友人や家族からの情報提供
- その他

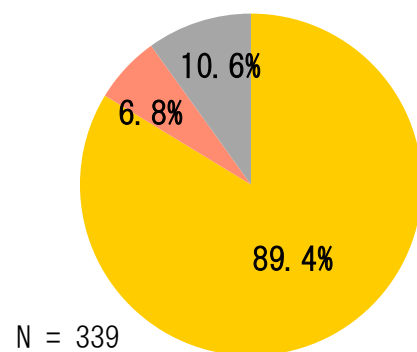
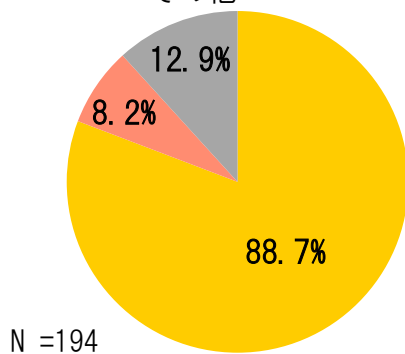


図12 SDGs（持続可能な開発目標）を知った経緯

●設問：SDGsの理解のための情報収集・学習について

SDGsの理解のための情報収集や学習の取組状況については、教員の57.7%に対して、職員の26.1%が取り組んでいると回答しています。

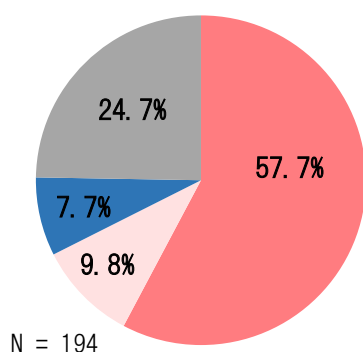
教員は、授業や研究等の様々な場面でSDGsの取組内容に触れる機会が多くあることが想定されます。

一方、職員は、SDGsについて考えることや活動する機会が業務上あまり求められていないと意識していることが想定されます。職員については、日常の業務にSDGsを紐づけるような取組みを紹介する機会等を設けることで、SDGs理解度の向上に繋がると考えられます。

教員

職員

- やっている
- やる予定
- やっていない
- 未定



【情報収集/学習の割合】
 やっている(予定含む)
 教員 67.5%
 職員 40.3%
 やっていない
 教員 7.7%
 職員 24.3%

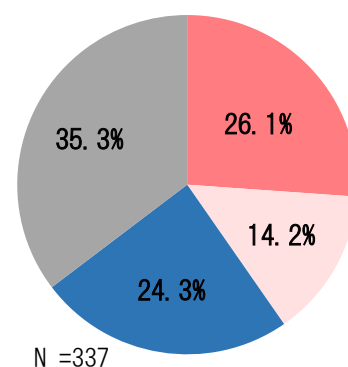


図13 SDGs（持続可能な開発目標）の理解のための情報収集・学習

● 設問：業務または日常生活を通じた社会課題解決の取組み

社会課題解決の取組みは、教員の6割が実践しているとの回答に対して、職員は4割を下回っており、開きがあります。所属では、「琉球大学病院」と、「上原キャンパス事務部」の取組度が低く現れていますが、病院地区での業務はSDGsの達成の社会課題解決に直結しており、SDGsの取組みは自身の生活とかけ離れた事柄ではないことを理解してもらう必要があると思われます。

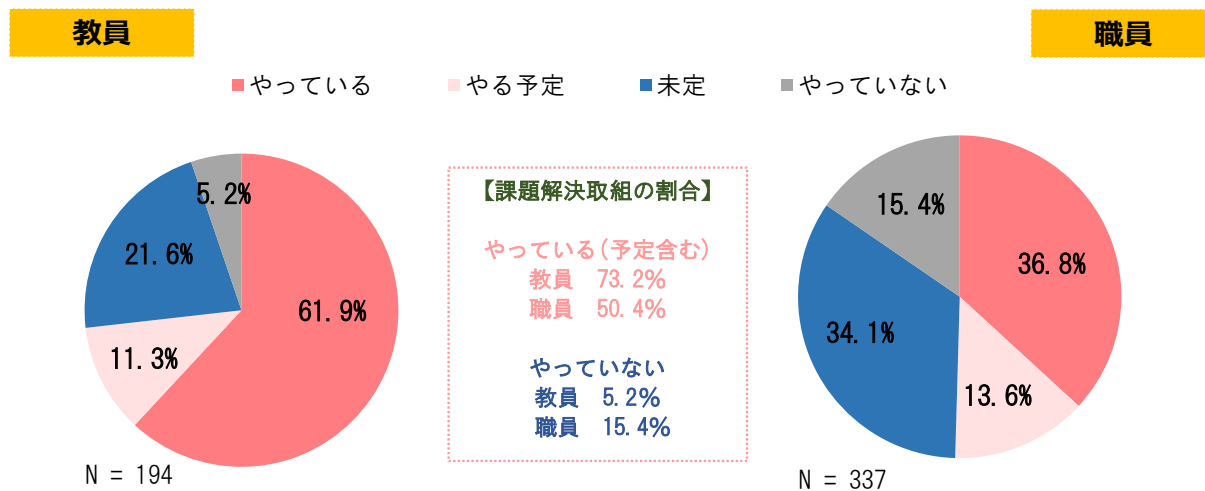


図14 業務または日常生活を通じた社会課題解決の取組み

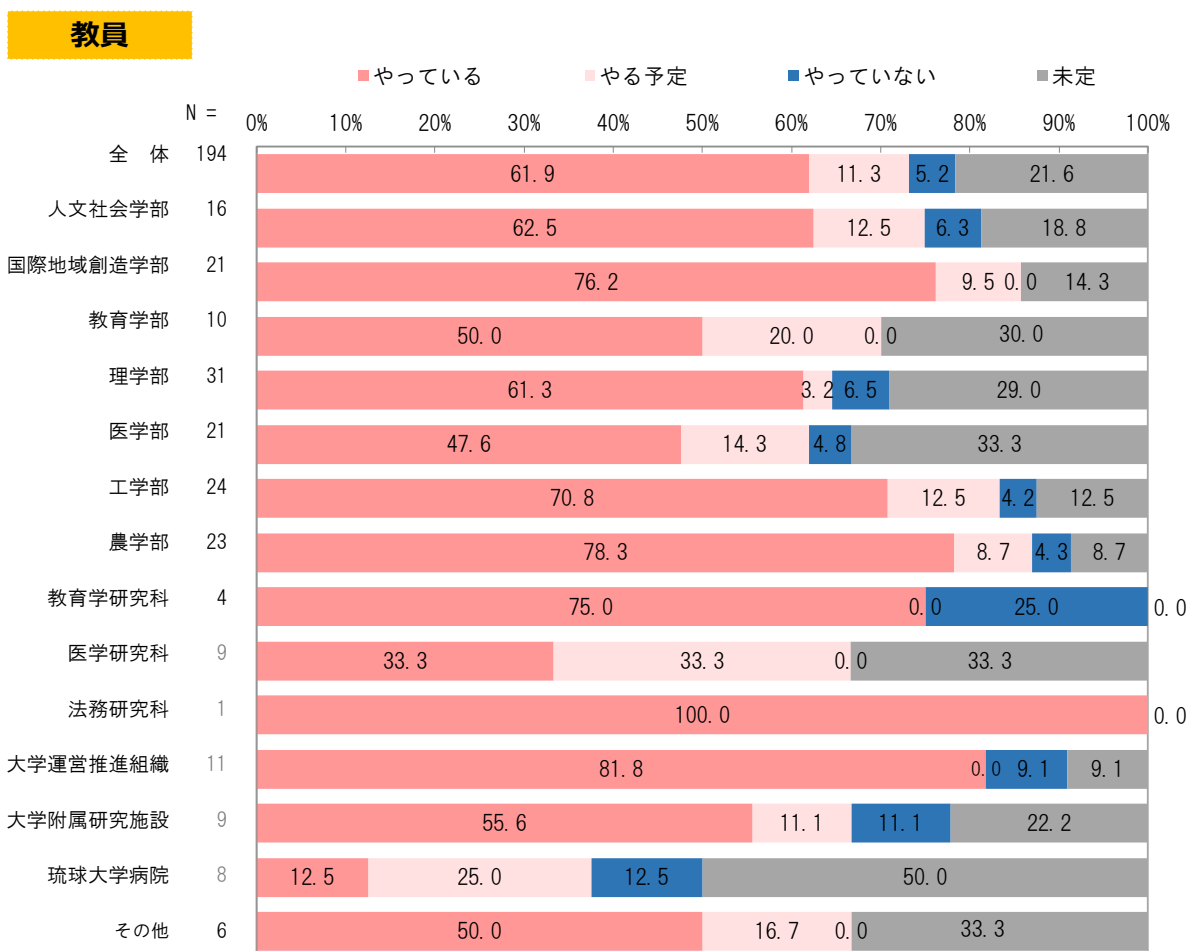


図15 教員・所属別業務または日常生活を通じた社会課題解決の取組み

職員

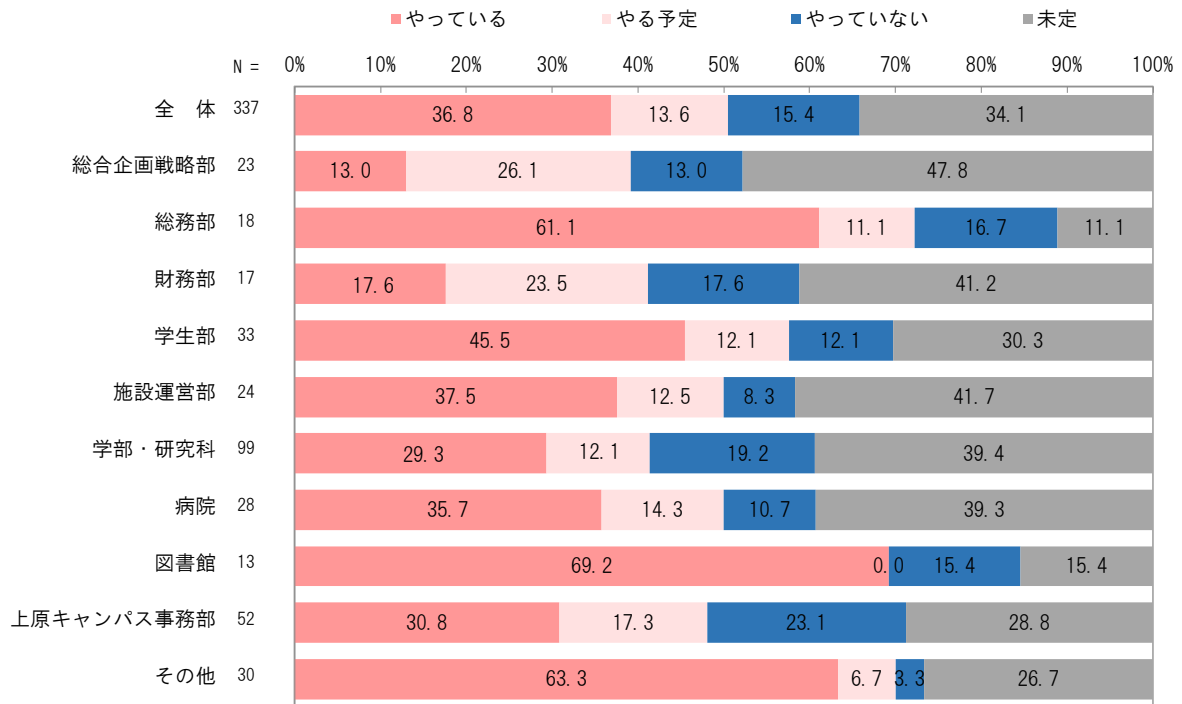


図16 職員・所属別業務または日常生活を通じた社会課題解決の取組み

● 設問：SDGsのゴールに合わせた自身の取組みの紐づけ

自身の取組みの紐づけについては、教員で「実践している」が55.7%、職員が25.5%となっており、「実践していない」は、職員が23.1%と教員の9.8%より高く、職員各々の業務との紐づけができていないことが想定されます。

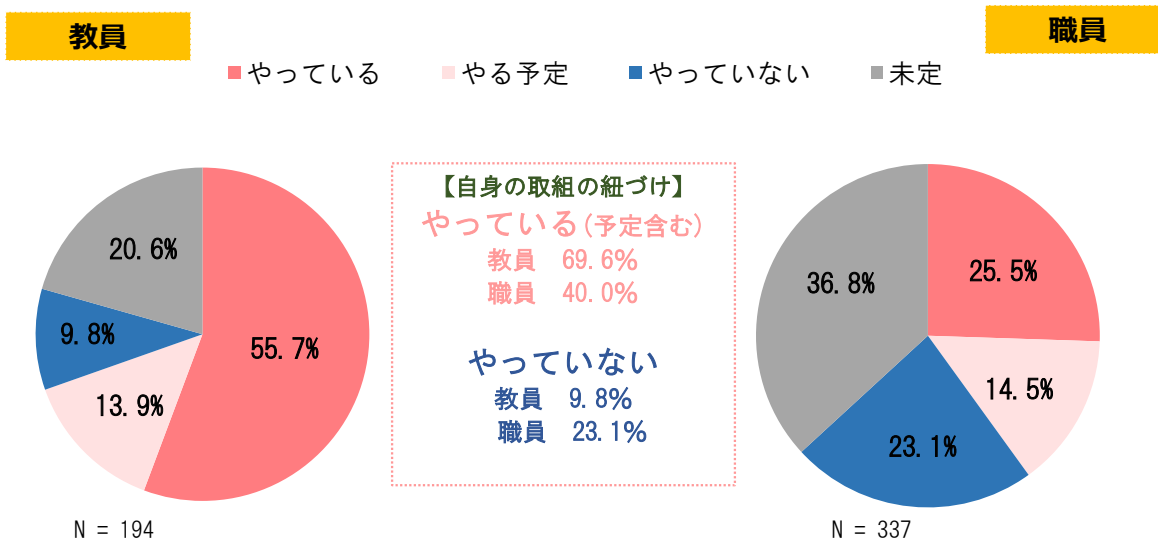


図17 SDGsのゴールに合わせた自身の取組みの紐づけ

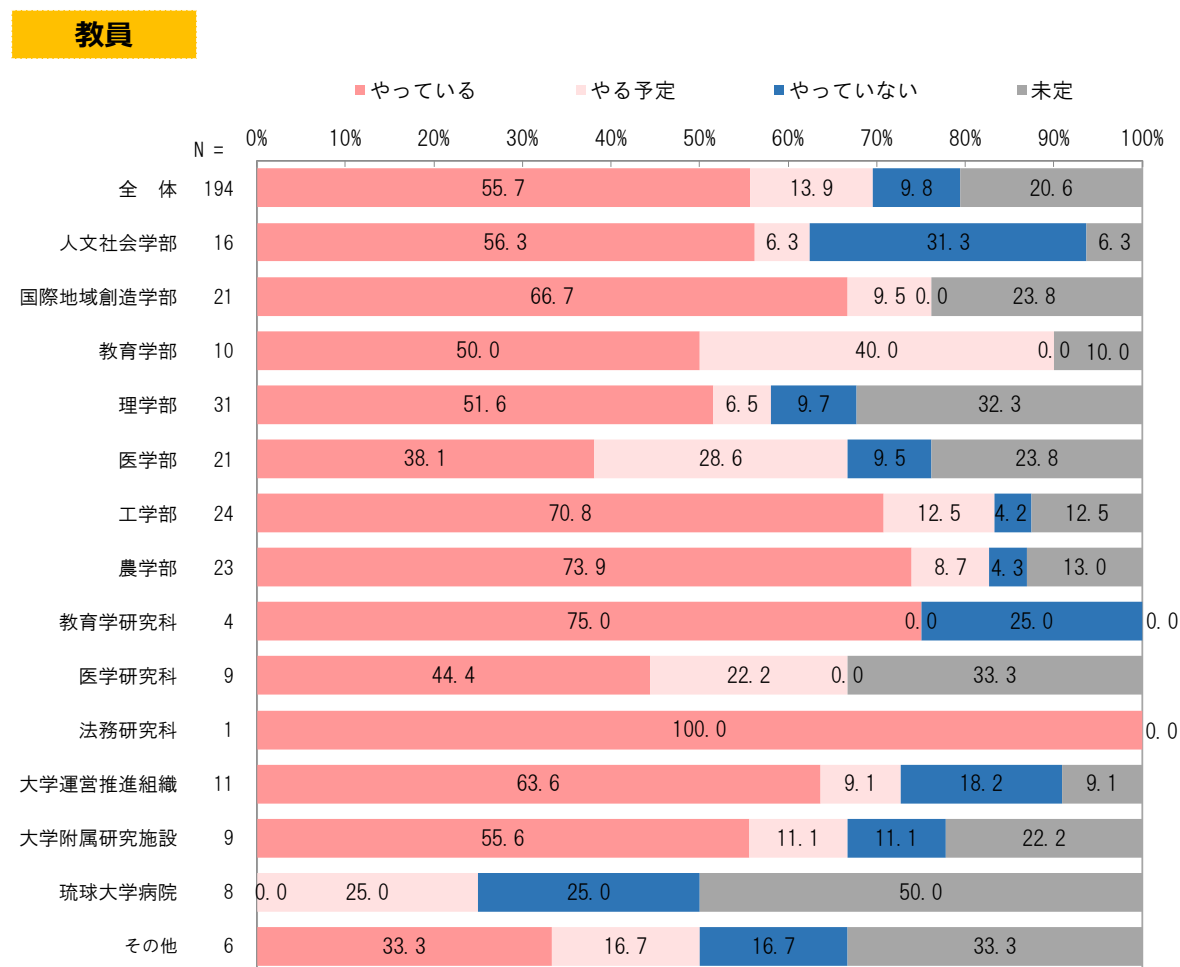


図18 教員・所属別 SDGsのゴールに合わせた自身の取組みの紐づけ

職員

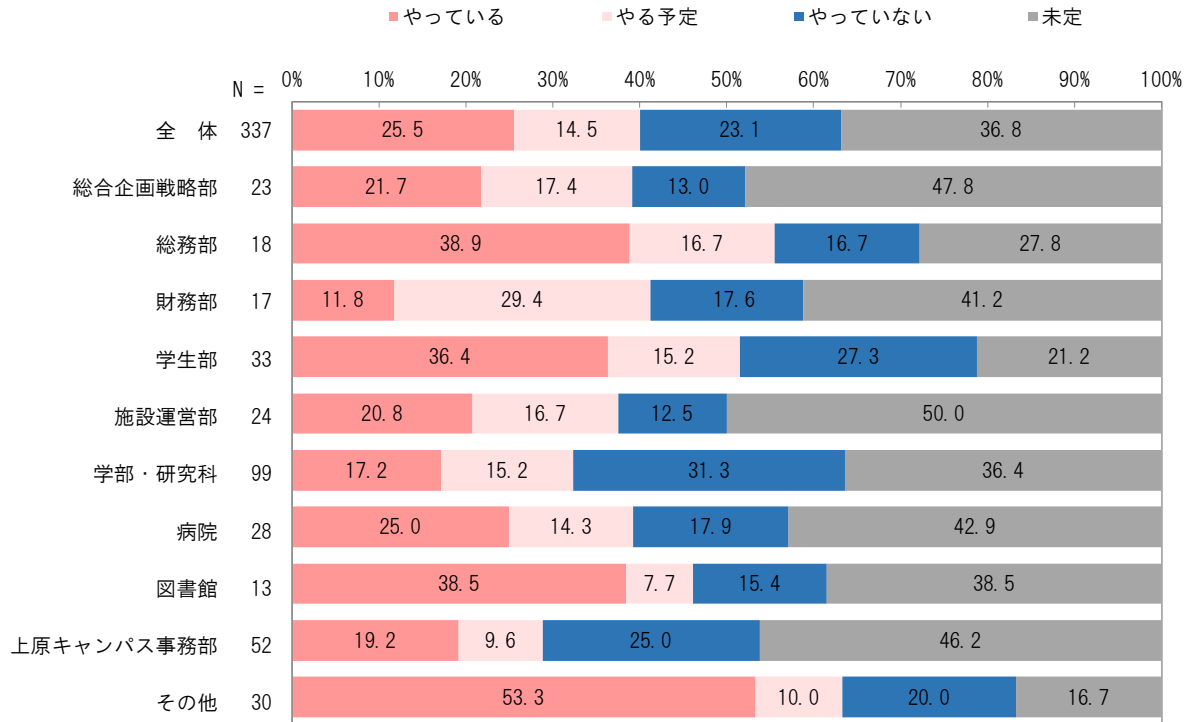


図19 職員・所属別 SDGs のゴールに合わせた自身の取組みの紐づけ

●設問：同僚、家族や友人などと SDGs について意見を交わす

同僚、家族や友人などと SDGs について意見を交わすことについて、教員は「実践している」が 5 割、職員は 3 割となっている、一方、職員の「やっていない」が 4 割と高くなっています。

教員と職員の役割が異なるため、SDGs への関心の性質が異なることが想定されます。教職員の会議等でもデジタル・データで配布・閲覧、研究棟の水や電気を大切に、島嶼地域の持続可能な環境への配慮など、小さなことから実施できることを、身近な教職員間で話し合う機会を設定することが重要と思われます。

教員

職員

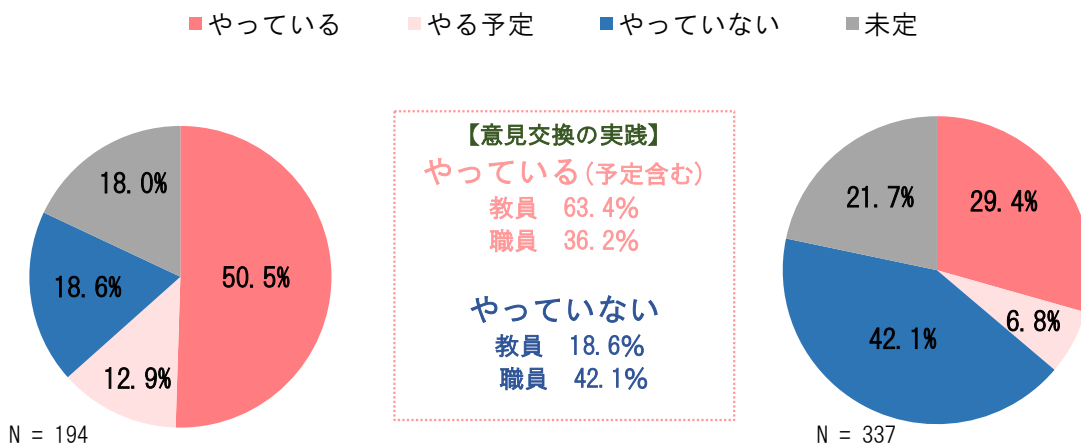


図20 同僚、家族や友人などと SDGs について意見を交わす

重点的に取り組むべき目標

教員・職員

「④質の高い教育をみんなに」「③すべての人に健康と福祉を」が上位

●設問：SDGsの17目標で特に重要であると思う目標

割合が高い順に「④質の高い教育をみんなに」、「③すべての人に健康と福祉を」、「①貧困をなくそう」が教職員共に上位を占めました。特徴として教員は「⑬気候変動に具体的な対策を」、「⑭海の豊かさを守ろう」について割合が高く、職員は「⑯陸の豊かさを守ろう」、「⑧働きがいも経済成長も」の割合が高くなっています。

教職員で重要である目標が異なる部分もあることから、各役割に応じた取組事例などのPRとして教職員の連携、学外の多様なステークホルダーとの連携などの紹介を通して、SDGsの理解度や実践度を高めることは重要であると思われます。

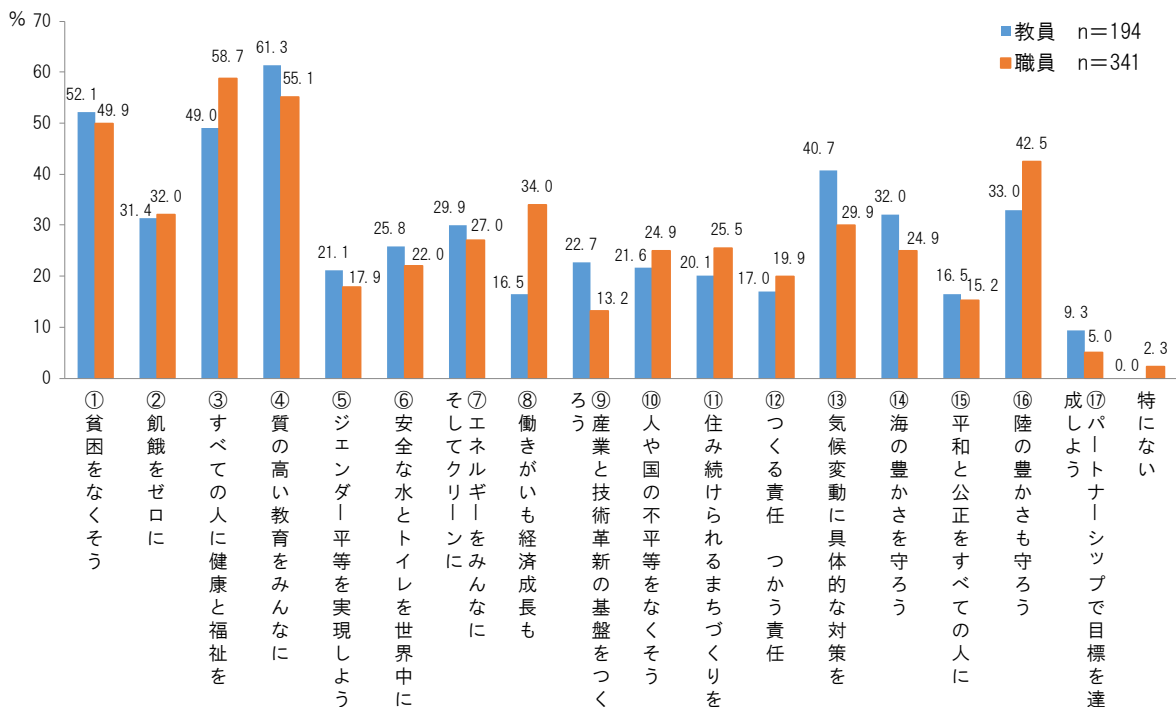


図21 SDGsの17目標で特に重要であると思う目標

●設問：SDGsの17目標で内容について深く調べてみたい目標（複数回答）

教員については、「④質の高い教育をみんなに」、「⑬気候変動に具体的な対策を」、「③すべての人に健康と福祉を」が職員より関心が高く、職員については、「⑧働きがいも経済成長も」、「①貧困をなくそう」、「⑭海の豊かさを守ろう」が教員と比較して関心が高くなっています。

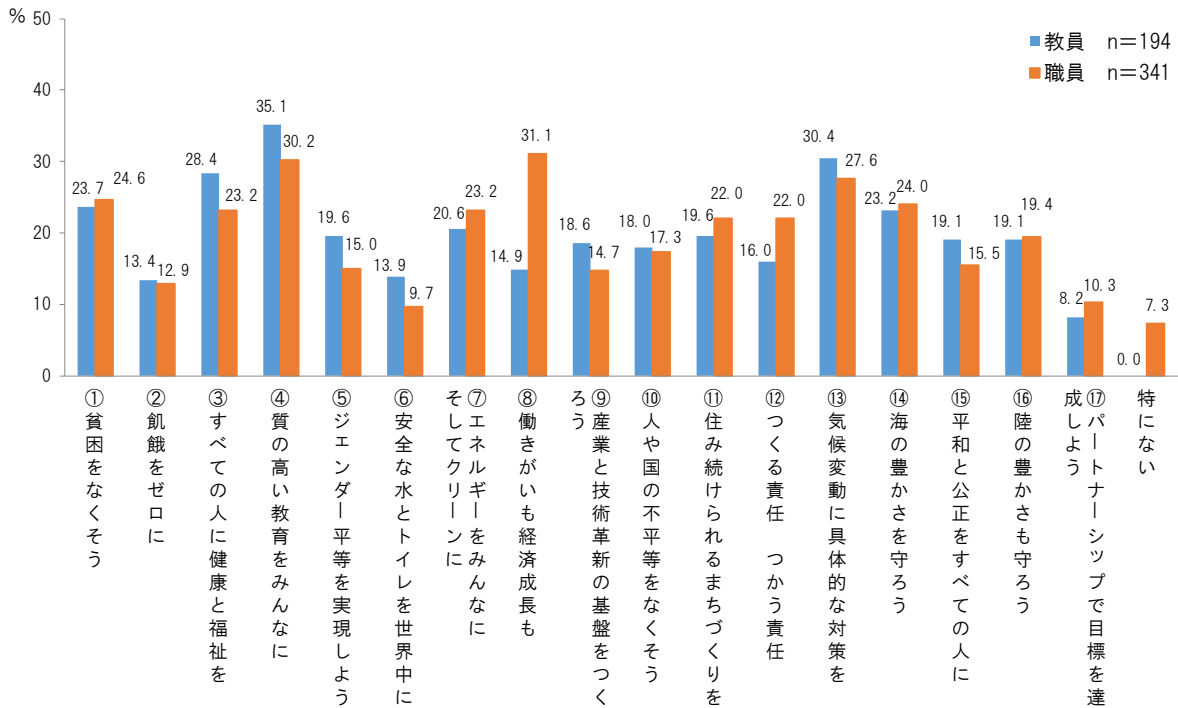


図22 SDGsの17目標で内容について深く調べてみたい目標

●設問：SDGsの17目標で琉球大学が特に取り組むべきだと思う目標（複数回答）

教員・職員ともに、「④質の高い教育をみんなに」が最も高い割合になっています。

教員については、「⑭海の豊かさを守ろう」が5割、次いで「③すべての人に健康と福祉を」が4割と続きます。

職員については「⑨産業と技術革新の基盤をつくろう」、「⑭海の豊かさを守ろう」が4割、次いで「⑧働きがいも経済成長も」は職員が38.4%に対して教員は24.7%と13.7ポイントの開きがあり、教員と職員で認識が異なります。

一方、亜熱帯の島嶼に位置する本学の特長となる「⑭海の豊かさを守ろう」は教職員ともに4～5割、「⑬気候変動に具体的な対策を」、「⑦エネルギーをみんなにそしてクリーンに」が教職員ともに3割とほぼ同水準の割合です。

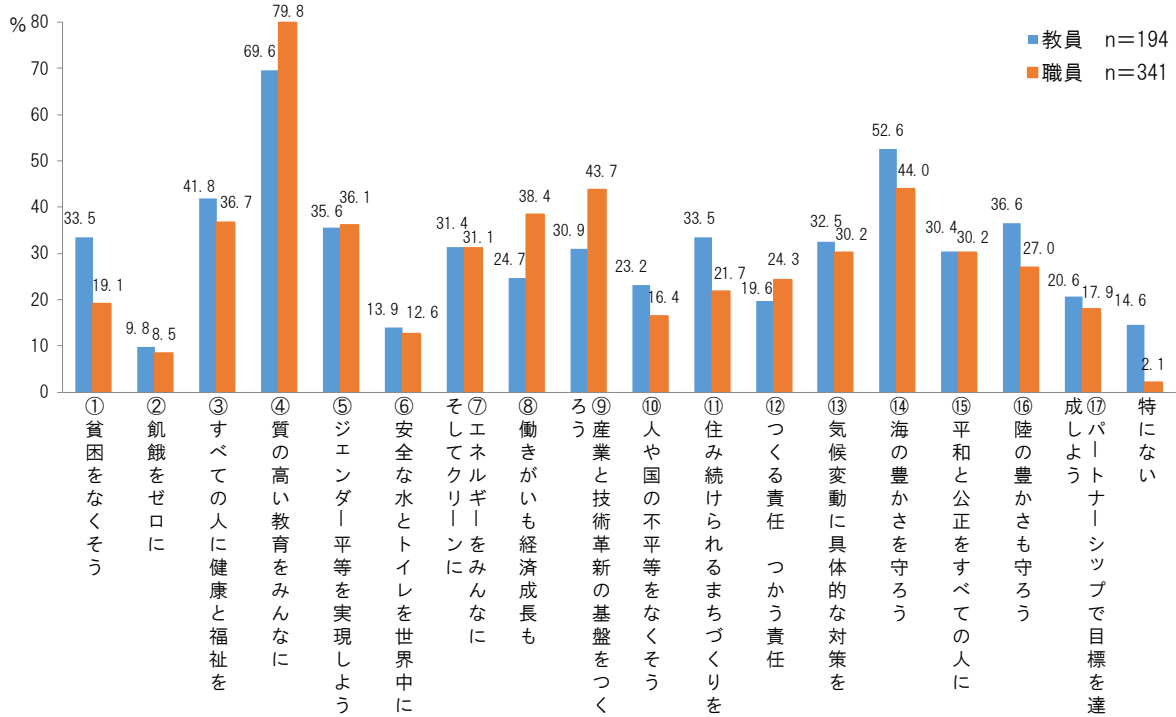


図23 SDGsの17目標で琉球大学が特に取り組むべきだと思う目標

●設問：琉球大学 SDGs 推進室の設置によるワーキング活動での重点的な取組目標（複数回答）

教員は、「SDGs 達成に貢献する研究プロジェクトの推進」が49.5%、職員は、「ホームページや SNS などによる SDGs 広報の推進」が43.1%で上位となりました。

教員では「ホームページや SNS などによる SDGs 広報の推進」が40.7%、次いで「子どもの貧困問題」が38.7%です。一方、職員では、「SDGs 教育カリキュラムの構築」が教員よりも8.8ポイント高く、現場での実践的なノウハウのニーズがうかがえます。

SDGs 達成に貢献する研究プロジェクトの推進を加速化するため、多様なステークホルダーと連携・協働していく広報活動、カリキュラムの構築など現場からの声を形にしていくことが求められます。

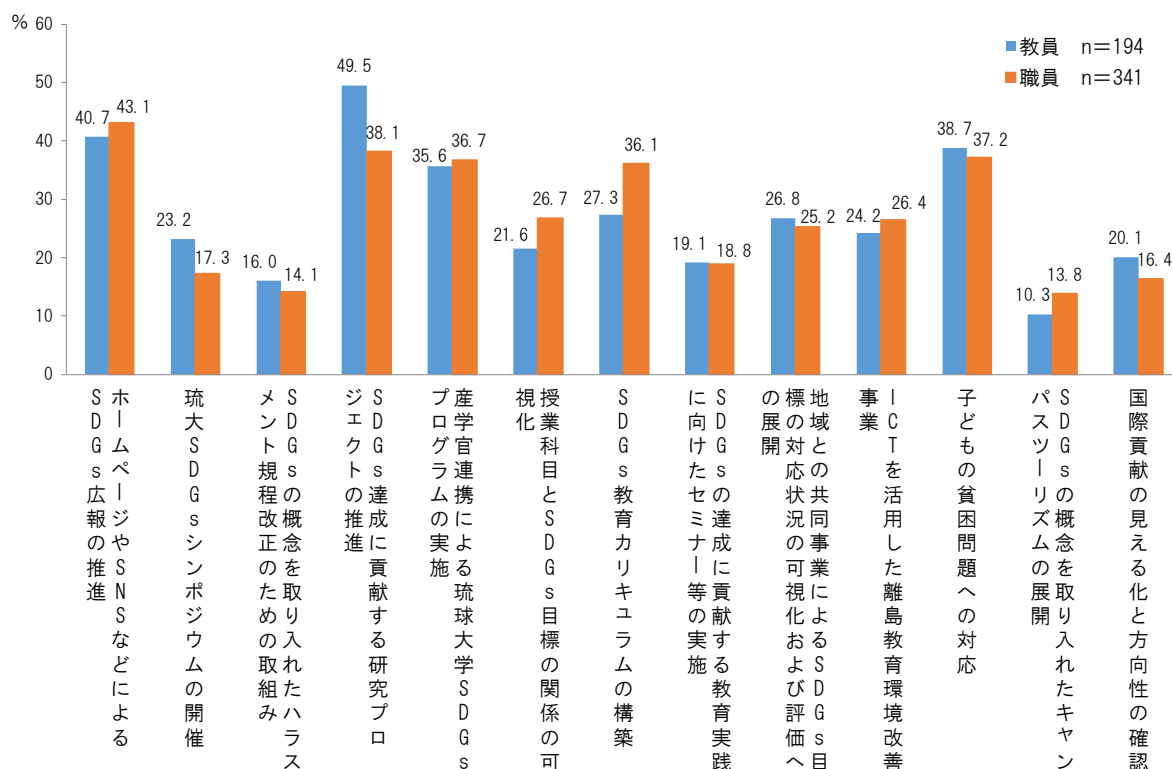


図24 琉球大学 SDGs 推進室の設置によるワーキング活動での重点的な取組目標

教員の SDGs との関わり

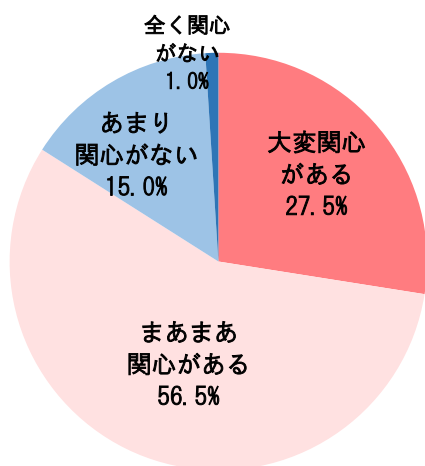
教員

SDGs に関連する科目提供への関心は 8 割と多い

● 設問：SDGs に関連する科目の提供

「関心がある」教員（大変関心がある（27.5%）+まあまあ関心がある（56.5%））では、84.0%が科目提供に関心があります。

所属別では、理学部の関心割合がやや低い傾向がうかがえます。



「大変がある」(27.5%) +
「まあまあ関心がある」(56.5%)

84%の教員が関心あり

図25 SDGs に関連する科目提供への関心度

	n	SDGsに関連する科目の提供への関心 (%)			
		大変関心がある	まあまあ関心がある	あまり関心がない	全く関心がない
全体	193	27.5	56.5	15.0	1.0
人文社会学部	15	26.7	60.0	13.3	-
国際地域創造学部	21	33.3	61.9	4.8	-
教育学部	10	50.0	40.0	10.0	-
理学部	31	22.6	48.4	25.8	3.2
医学部	21	23.8	66.7	9.5	-
工学部	24	25.0	54.2	16.7	4.2
農学部	23	30.4	52.2	17.4	-
教育学研究科	4	50.0	50.0	-	-
医学研究科	9	22.2	66.7	11.1	-
法務研究科	1	100.0	-	-	-
大学運営推進組織	11	27.3	63.6	9.1	-
大学附属研究施設	9	22.2	66.7	11.1	-
琉球大学病院	8	-	75.0	25.0	-
その他	6	33.3	33.3	33.3	-

表1 所属別 SDGs に関連する科目提供への関心度

SDGs に関係している研究テーマは「環境・エネルギー・GX」が多い

● 設問：SDGs に関係している研究テーマ

研究テーマを5つの分類に分けて集計したところ「環境・エネルギー・GX（グリーン・トランスフォーメーション）」が3割を占め、「教育・学習」「健康・Well-being・QOL」が同数で約2割となりました。

研究テーマでは、SDGsの17の目標を網羅しており、特に「③すべての人に健康と福祉を」「④質の高い教育をみんなに」が3割近く、最も関連がある研究テーマとなりました。

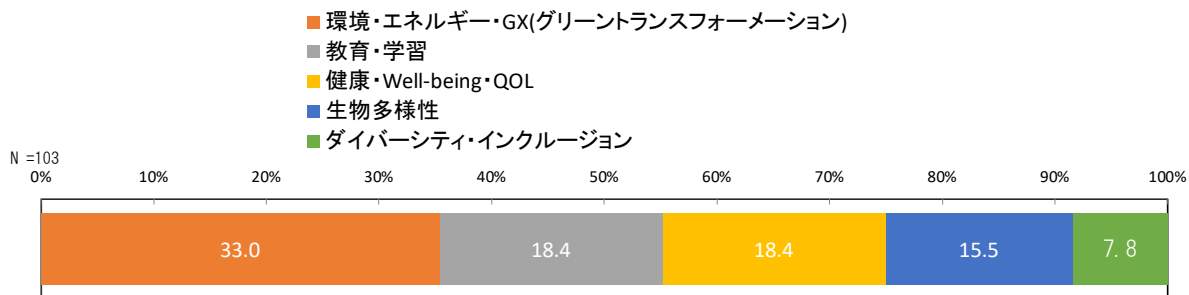


図26 SDGs に関係している研究テーマ

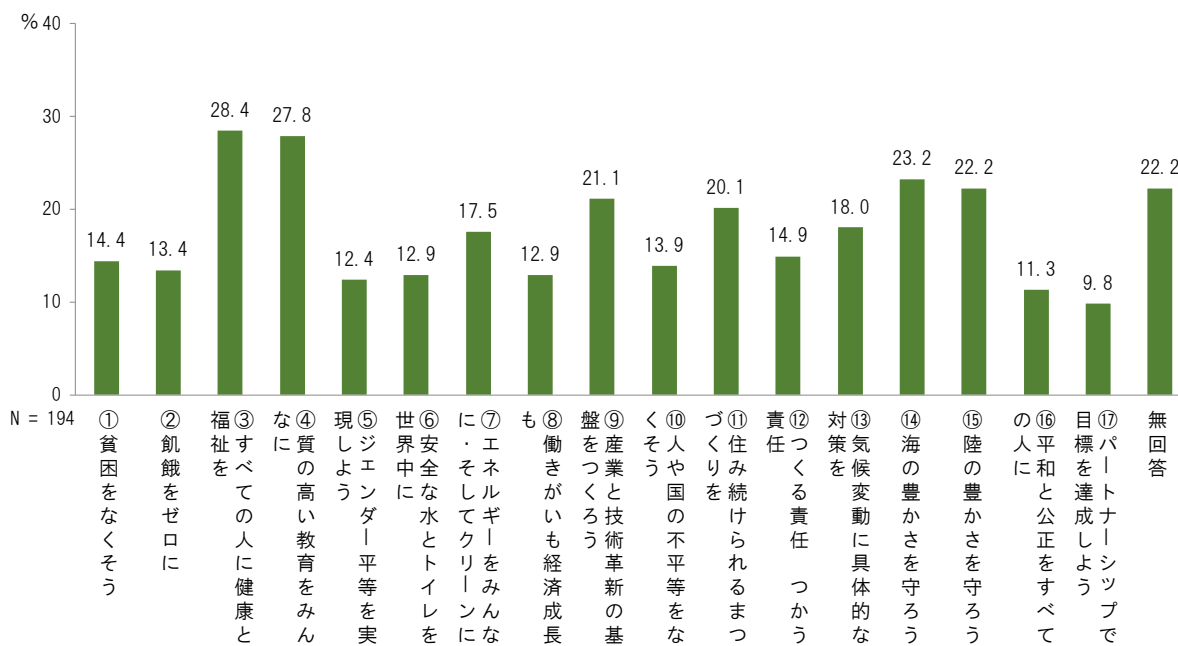


図27 研究テーマが関連している SDGs ゴール（複数回答）

●設問：産学官連携で共同・受託研究

「はい」との回答は 27.8%、「いいえ」は 72.2%で、「いいえ」が高い結果となりました。「はい」と回答した 54 件をみると、「環境・エネルギー・GX（グリーン転換フォーメーション）」が 32.4%と高く、「健康・Well-being・QOL」が 26.5%と続きます。

SDGs の目標では、「⑨産業と技術革新の基盤をつくろう」が 46.3%と他目標よりも研究との関連がみられます。

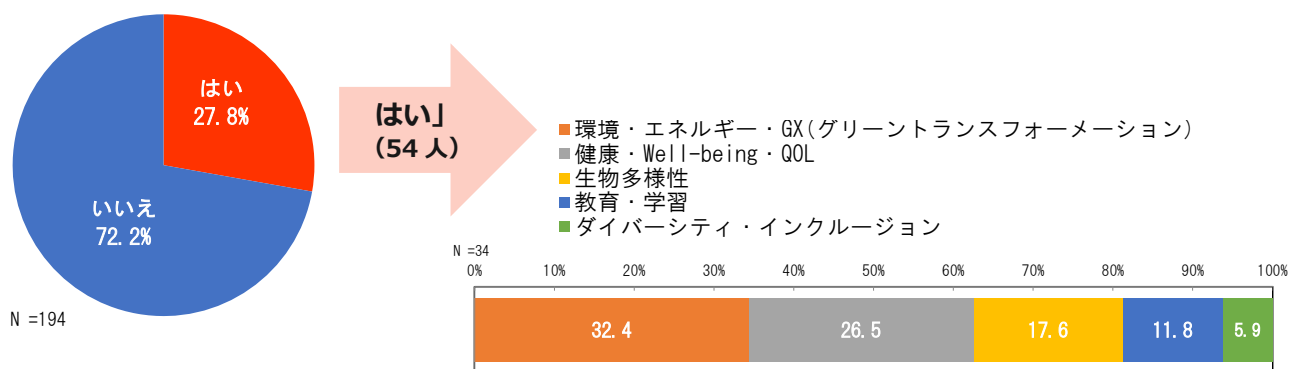


図28 SDGs に関連する産学官連携での共同・受託研究

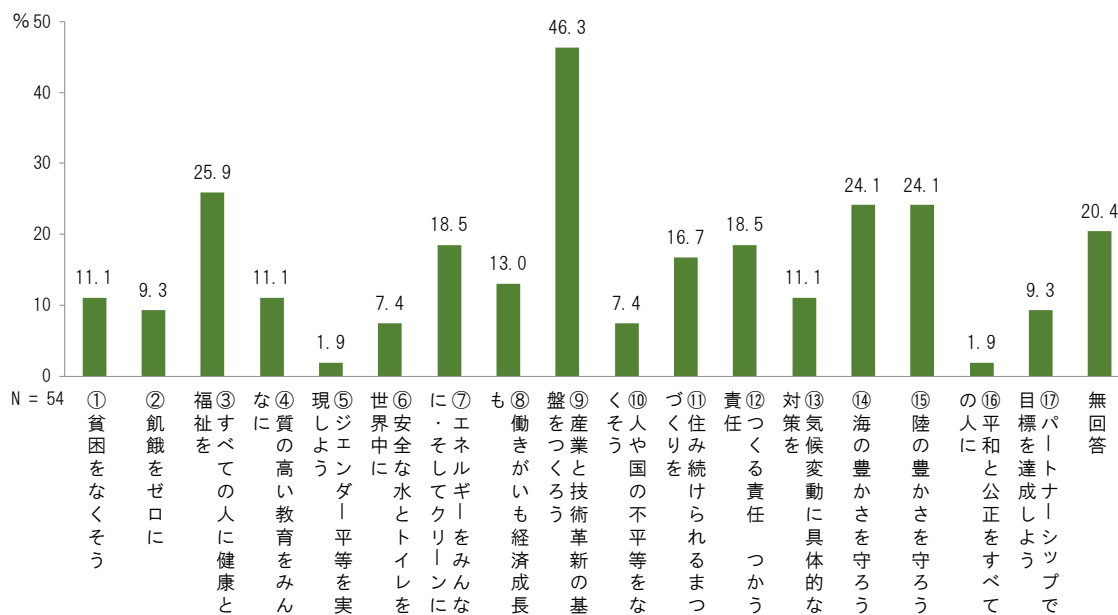


図29 共同・受託研究テーマが関連している SDGs ゴール

● 設問：研究者データベースのSDGsアイコン設定の意向

研究者データベースのSDGsアイコン設定については、「既に反映している」が18.6%と低い状況となっています。一方、「反映させてもよい」が46.4%と半数近くが前向きな意向を示しています。

「どちらとも言えない」の26.3%の教員への理由等を聞き取り、SDGsが社会に浸透している現状から、多様なステークホルダーとの連携等の推進において設定率の向上策を考えていく必要があります。

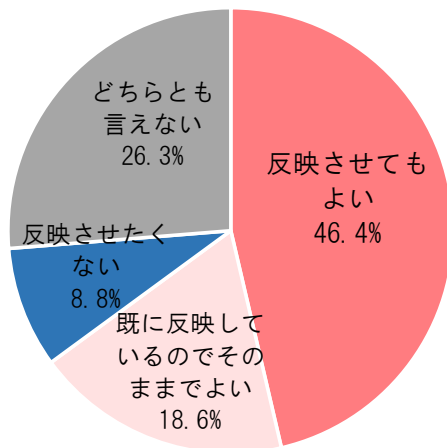


図30 研究者データベースへのSDGsアイコン設定の有無

● 設問：SDGs達成に貢献する研究テーマへの支援制度の利用意向

支援制度の意向については、「利用したい」が36.1%であるが、「どちらとも言えない」が59.8%を占めています。

支援制度の内容や活用方法について、丁寧に説明することで、利用したいと思う研究者が多くなると考えられます。

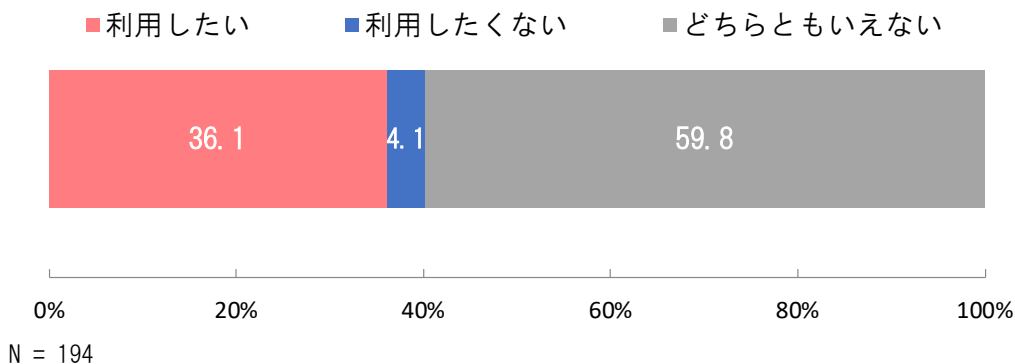


図31 SDGs達成に貢献する研究テーマへの支援制度の利用の意向

今後のSDGsの取組みに関する意見

教員・職員

- アンケートの最後に、本学のSDGsに関する今後の取組みについてご意見を頂きました。忌憚のない意見を頂きましたが、全てを掲載することは紙面の制約につき、抜粋して紹介します。

教員



すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する

● 主な意見

- ・基礎研究にしっかり予算をつけてほしい。SDGsは目的ではなく、個々の基礎研究の結果が、それにつながらると思う。
- ・SDGsに批判的な視点も学生に対しては提供してほしい。
- ・留学生を取り組んで、国際比較は共修教育に有意義。
- ・教育・研究・社会貢献をバランスよく行っていければよい。
- ・大きなプロジェクト支援も大事だと思うが、少額の研究支援も多く行くと、SDGsを意識した研究も盛んになると思う。



ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る

● 主な意見

- ・性的マイノリティについての琉球大学の指針の作成、ダイバーシティ推進のための宣言の中に「性的マイノリティ」という文言を入れることについて、実現していません。「誰一人取り残さない」というSDGsの目標達成のためにも大学の積極的な取り組みをしてほしい。
- ・SDGsのテーマのうち、社会全体で取り組みやすいものと取り組みにくいものがあると感じる。特に取り組みにくいテーマ（貧困、平和、やジェンダーに関するテーマ）について、大学主導で積極的に実施していく必要があると思う。
- ・SDGsは大別すると貧困・ジェンダー・環境対策だと思っており、その三本柱で大学でできる限りを取り組んでいけば良い。
- ・子どもの貧困問題を解決するための研究・教育ポストを設けると効果的であるとよい。



すべての人々のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用およびディーセント・ワークを推進する

● 主な意見

- ・SDGsの達成に向けて各教員が行っていることが、県民特に、地域住民にわかりやすく見える（可視化）ような取組みも考えてもらえたら良い。
- ・SDGsに関する研究を推進して欲しいが、個々の教員への負担を最小限にすることを最優先に進めて欲しい。既に研究以外の業務が多く、研究時間の捻出に日々苦勞している。例えば報告書記載内容の簡素化、事務手続きの代行など。
- ・セミナーやシンポジウム等を土日開催とするなど、平日の業務時間帯と重ならないようにしてもらいたい。
- ・定員削減による現教員の負荷が大きくなっていると感じる。それらを解消し教員の活動できる幅を持たせてほしい。



12 持続可能な消費と生産のパターンを確保する

● 主な意見

- ・琉球大学が独自に再生可能エネルギーを導入し、2030 年度までに現在の CO2 排出量の半分に、2050 年までにゼロにすることを目指すべきである。
- ・大学の電力を 100%再エネしてほしいです。
- ・キャンパスの美化活動を促進して頂きたい。



17 持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化

● 主な意見

- ・沖縄 JICA と協力して国際連携と SDGs をもっと増やしていいと思う。
- ・SDGs の取組を通じて、産学官連携による教育・研究の展開などが活発化し、地域、企業、行政などとの有機的な繋がりが更に強化されると良いと思う。
- ・沖縄の歴史的、地理的な特殊性を踏まえ、また、齋藤幸平の『人新世の「資本論」』などでの批判を踏まえた上で、SDGs として何が出来るかについて、全学で知恵を集めてはどうか。
- ・地域課題を解決するための共同研究や地域貢献の事業に関しての具体的な取り組みを構築する際に当該地域を拠点に活動している「産」の参入のハードルが高いように感じる。「産」に有利になるようなくみづくりもこれから必要かと思う（この点では結構「官」が頑張っているとは思う）。

職員



4 すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する

● 主な意見

- ・SDGs は、社会や企業だけでなく、様々な業種でも SDGs に関する理解や知識が必要となっているので、学生に SDGs に関する知識をつけたり意識づけや行動につながる教育や学習の機会を提供したほうがいい。
- ・教育は貧困、健康、経済、意識づけの根幹の基盤となるものと考えている。その根幹である琉球大学は沖縄県の代表として国内ならず世界に活動や理念を発信できる存在になってほしい。職員の一人一人が SDGs への意識づけが必要であると考えます。



8 すべての人々のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用およびディーセント・ワークを推進する

● 主な意見

- ・幅広い取り組みは教職員の負担を大きくするため、大学として得意分野に特化した SDGs の取り組みを行うべきと考える。
- ・世界的にみてもとても大切な取り組みだと思いますが、そのせいで仕事が増えたり、負担となつては意味がないと思います。セミナーやシンポジウム等を土日開催とするなど、平日の業務時間帯と重ならないようにしてもらいたい。
- ・教育機関として、次世代の育成が重要と考える。授業（小、中含め）の一環でもよい、職員の研修でもよいと思うが、学内（校内）に至る所に 17 の目標のロゴを貼ることで意識が高まるのではないかな。
- ・職員の働き方を見直す。



12 持続可能な消費と生産のパターンを確保する

● 主な意見

- ・ゴミ箱削減。ごみを減らす、持ち帰る。
- ・ゴミを減らすことを心掛ける。食品用のトレーをリサイクルに出すことによってゴミの量を大幅に減らすことが出来る。



17 持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

● 主な意見

- ・各地域で様々な取り組みがされているが、個々バラバラで行っているように思う。行っている事は大事な事でもあるが、その取り組みが一緒に出来ればもっと大きな価値を生み出すことにもなるような気がする。可視化されていけば賛同者も増えていく。
- ・講演会やシンポジウムも大切だとは思いますが、エコツーリズムなど、参加者が意識を持って行動できるような（なるべく体験のものがよいと思います）プログラムがあれば、より目標を実感できると思う。
- ・大学として取り組む SDGs 目標を明確化し、教職員に周知し、セミナー等で理解を促し、小さいアクションを大学全体で行っていくこと。

大学への要望等

● 主な意見

- ・琉球大学において SDGs に取り組むことは大変よいことだと思います。どのような取り組みをしているかを積極的に外部に発信したほうがよいと思う。
- ・SDGs に関する研究を進めることは良いが、「SDGs に関係する研究を特別に優遇すること」および「SDGs に(直接)関係しない研究を冷遇すること」は絶対に反対である。
- ・教職員に対して推進室が SDGs とは何かということが分かるようなセミナーをもっと提供するべきだと思う。例えば福岡県のように組織として SDGs にどう取り組むかというのを明確にしてほしいと思う。
- ・本学公式ウェブサイトで、そのニュースに関連する SDGs 目標のアイコンを共に配置しているのは視覚的にも目を引き良い。
- ・大学として 17 目標のうちどの項目を推し進めたいのか。また、推し進めた項目に対する評価の検証があまり見えない。SDGs のシンポジウムをオンラインで行った方が効果的と考える。
- ・本学独自の SDGs 研究を推進する研究者への助成金事業の創設の提案（年間総額 100 万円あたりで 3 件程度で評価が向上すれば金額を増やす等）。
- ・SDGs は日本では積極的に取り組んでいるが、諸外国はそこまで関心を持っていない。そのため、近いうちに廃れると思うため、あまり取り組む必要性を感じない。

取組事例 – 研究 WG の取組み–

琉球大学 SDGs 社会課題解決研究プロジェクト

SDGs の達成には大学の広範な貢献が必要とされていますが、中でも SDGs に関する研究は、大学が担う SDGs への貢献の大きな一つの柱とされています。SDGs 推進室の研究 WG では、戦略的研究推進経費事業「琉球大学 SDGs 社会課題解決研究プロジェクト」として SDGs に関する研究を広く学内公募し、本学の SDGs 研究を支援しています。令和4年度は、応募件数 20 件の中から、表1に挙げる5件の課題を採択しました。

表 1

部局	研究課題
教育学部	Creative Learning Environment 地域資源を取り組む創造的な教育環境づくり・モデルプロジェクト実践
教育学研究科	教師のウェルビーイング(well-being)を向上させる研修プログラムの開発
医学研究科	沖縄県骨盤臓器脱疾患の実態調査と予防戦略の構築
農学部	登録された世界自然遺産の緩衝地帯および周辺管理地域で実施する環境に配慮した立木の収穫と伐採後の更新面に多種、多様な樹種が共存する更新技術の解明
農学部	資源・エネルギー循環でつなぐ食農ゆいまーる (琉大地域食品リサイクルプロジェクト)

また、令和2年度から上記の学内公募事業や外部資金獲得による SDGs のゴール達成を目指す研究成果等を学内外へ広く発信するため、「琉大 SDGs 研究シンポジウム」を開催しています。

さらに、学内の SDGs 研究の推進とシーズの発掘、そして SDGs 研究に関する学内ネットワークの構築を目的に、SDGs ランチセミナーをオンラインで開催し、学内の様々な研究者に話題提供頂いています。令和4年度は4回セミナーを開催し、各回1名の研究者に、各々が行っている SDGs に関する研究や関連する SDGs のトピックについて紹介してもらいました。毎回、教員のみならず職員らも多く参加し、発表者を囲んでざっくばらんに質問や意見交換が行われています。

取組事例 – 教育 WG の取組み –

広く、深く SDGs について学ぼう – SDGs 関連科目 –

琉球大学は、建学の精神である自由平等・寛容平和を継承・発展させた3つの基本理念、すなわち「真理の探究」「地域・国際社会への貢献」「平和・共生の追求」のもと、「地域と共に豊かな未来社会をデザインする大学」を目指しています。

それぞれの学部・大学院の授業は、学士教育プログラムおよび大学院教育プログラムのディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに基づき提供されるものですが、授業の中で広く、深く SDGs について学ぶことができる科目もあります。

そこで、授業で取り扱う内容に、17の持続可能な開発目標について、

- ① 持続可能な開発目標について学ぶ内容
- ② 持続可能な開発目標を達成するために必要な知識やスキルについて学ぶ内容
- ③ 持続可能な開発目標を達成するために取り組む動機付けとなる内容

のいずれかを含む場合、関連する17の持続可能な開発目標を示して「SDGs 関連科目」として取り扱うこととしています。

琉球大学で SDGs について学びたい人は、「SDGs 関連科目」を参考に各教育プログラムの枠を超えて SDGs について幅広く学ぶことができます。

SDGs 関連科目はこちらから



SDGs を学際的・体系的に学ぼう – 副専攻の開設 –

琉球大学は、学部及び学科等で編成する教育課程以外に、学生の「複眼的な思考力」「総合的な理解力」を育成するための教育課程として副専攻を開設しています。

現在、5つの副専攻を開設していますが、特に SDGs に関する学びを深めることが出来る「総合環境科学副専攻」「グローバル津梁プログラム副専攻」を紹介します。

- 総合環境学副専攻
 - ☑ 環境についての知（環境リテラシー）を修得します。
 - ☑ 「環境」をテーマにした科目を学際的科目群として、学部横断的学びを基礎とし、「総合環境学」として理論と実践を多面的に学びます。
 - ☑ 文系・理系を問わず、本学の多くの分野の教員から人間環境、自然環境、社会環境、地球環境をめぐる諸問題について学びます。
- グローバル津梁プログラム副専攻
 - ☑ 語学系科目や留学生との多彩な協働実践を通し、グローバル時代を牽引するリーダーシップ能力及びスキルを修得します。
 - ☑ 自分の専門を超えて複合的な問題を統合、解決する「統合型リーダー」と、特定の課題に対する課題解決を目指す「特定課題型リーダー」を育成します。

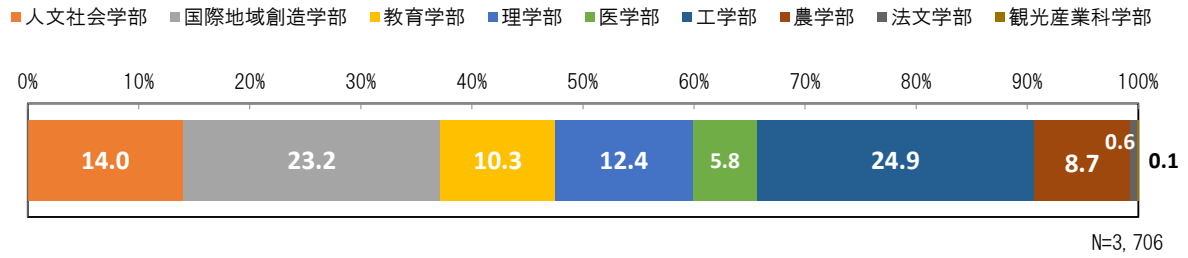
回答者の基本属性

学部学生

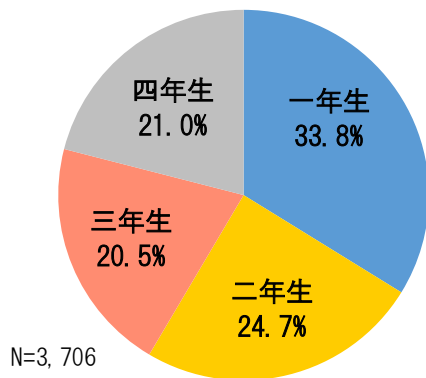
学部学生について

学部学生の属性

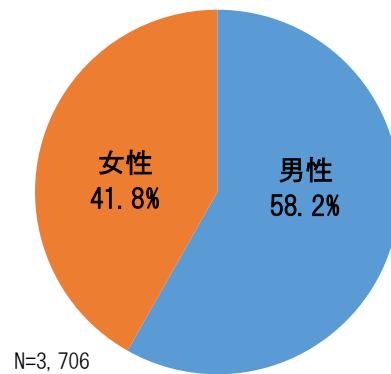
【学部】



【学年】



【性別】



SDGs の理解度

学部学生

SDGs の理解度は 8 割と高い

● 設問 : SDGs (持続可能な開発目標) の理解度

SDGs の理解度は、学部学生の 8 割が「内容を理解している」との回答です。

学部別では、国際地域創造学部の「内容をよく理解している」(26.9%)、次いで「農学部」(23.6%) となります。「医学部」は「内容をよく理解している」が 15.4%で他学部より低いですが「内容をある程度理解している」は 72.1%と最も高い割合につき、SDGs の目標について講義などで理解を深めることで、実際は「内容をよく理解している」との潜在層が含まれている可能性もあります。

学部学生

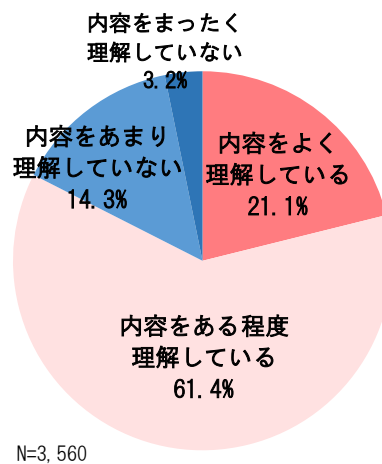


図32 SDGs (持続可能な開発目標) の理解度

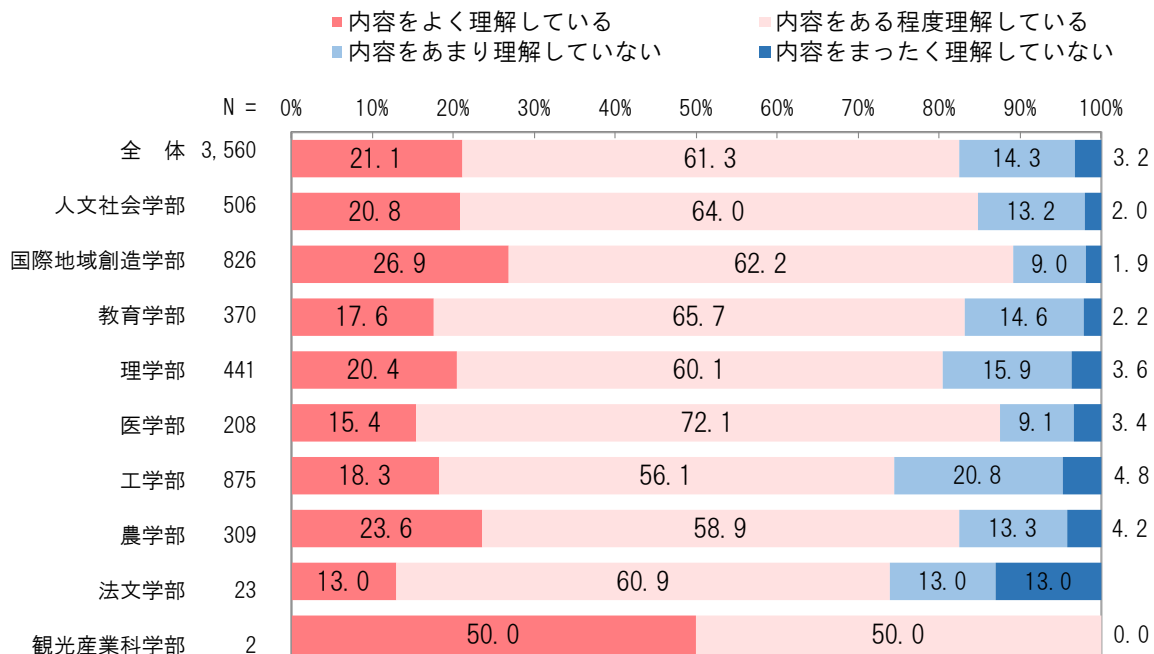


図33 学部別 SDGs (持続可能な開発目標) の理解度

学年別では、SDGsの理解度は、一年生が26.0%で最も高く、四年生が19.6%と続きます。一年生から四年生まで「理解している」学部学生は8～9割程であり、高い割合を示しています。

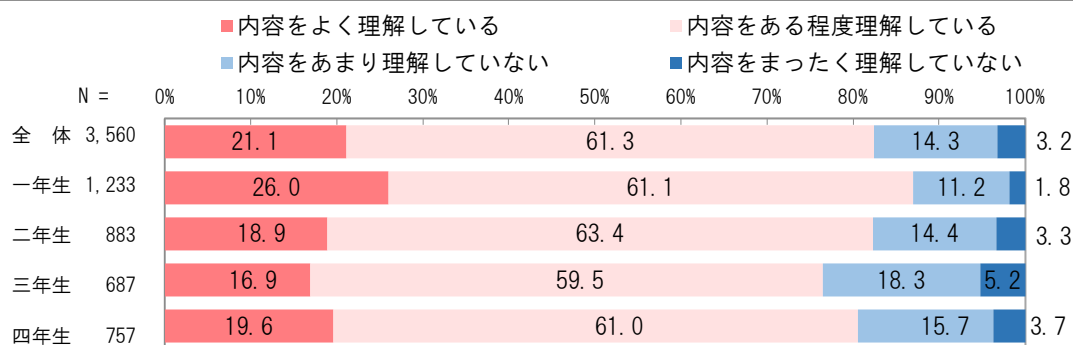


図34 学年別 SDGs（持続可能な開発目標）の理解度

● 設問：SDGsの理解度×SDGsの課題解決のための取組み

「内容を理解している」の73.6%が課題解決の取組みを実践しているが、「内容をまったく理解していない」の5.3%しか取組みを実践しておらず、理解度と実践度が相関的であることがうかがえます。

「内容をまったく理解していない」学部学生の94.8%は「まったくしていない」との回答であったため、引き続き講義等でSDGsの知識の学習も必要と思われる。

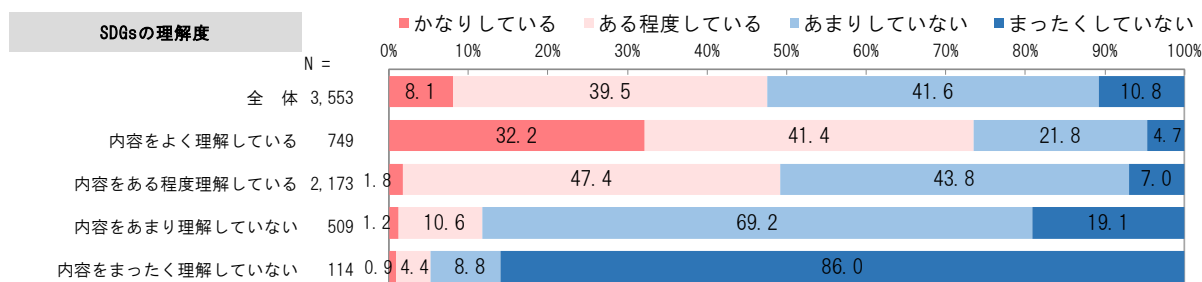


図35 SDGsの理解度×SDGsの課題解決のための取組み

● 設問：SDGsの理解度×SDGsのゴールと自身の取組みの関連づけ

上記設問のSDGsの課題解決のための取組みとほぼ近似した結果ですが、自身の取組みの関連付けにおいて、やや実践割合が低くなっています。

学内や日常生活においてSDGsの掲げているゴールとターゲットの多くに関わりがあります。日常生活とSDGsの目標は重なることが多いため、今一度SDGsのレクチャーなどの機会を設け生活と紐づいているという発見を促すことが大切であると思われる。

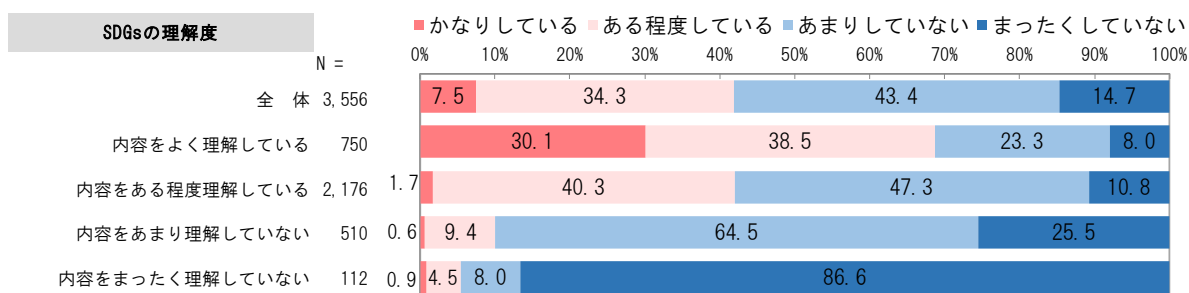


図36 SDGsの理解度×SDGsのゴールと自身の取組みの関連づけ

課題解決の取組み

学部学生

課題解決の取組みは半数が実施

● 設問：SDGs 理解のための情報収集・学習の取組み

学部学生では「している」との割合は 51.3%で半数です。「かなりしている」は1割程で、学部別では「農学部」(13.3%)、次いで「法文学部」(13.0%)と続きます。「していない」は「工学部」で 56.1%、「理学部」で 54.8%と理系の割合が高くなります。

講義等や学内活動と関連づけがされることで、主体的な学習意欲につながることも想定され、大学全体でのカリキュラム構築や意識醸成を図っていくことが重要です。

学部学生

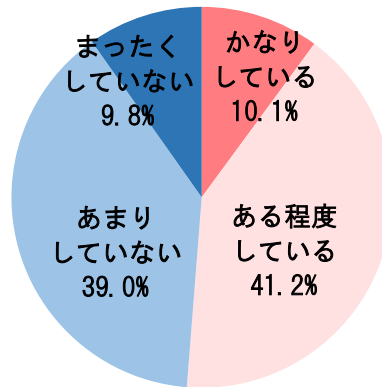


図37 SDGs 理解のための情報収集・学習の取組み

		n	SDGs理解のための情報収集・学習 (%)			
			かなりしている	ある程度している	あまりしていない	まったくしていない
全体	3,555	10.1	41.2	39.0	9.8	
学部	人文社会学部	506	10.3	36.6	41.3	11.9
	国際地域創造学部	825	12.4	50.1	31.2	6.4
	教育学部	371	8.4	42.9	42.3	6.5
	理学部	438	10.3	34.9	43.4	11.4
	医学部	208	7.7	44.7	38.0	9.6
	工学部	873	7.8	36.1	42.8	13.3
	農学部	309	13.3	43.7	36.6	6.5
	法文学部	23	13.0	43.5	26.1	17.4
	観光産業科学部	2	-	50.0	50.0	-
学年	一年生	1,231	11.8	44.8	36.2	7.2
	二年生	880	8.5	38.5	43.2	9.8
	三年生	689	8.9	39.8	38.5	12.9
	四年生	755	10.2	39.7	39.1	11.0

図38 学部/学年別 SDGs 理解のための情報収集・学習の取組み

●設問：SDGsの課題解決のための取組み

課題解決の取組みは、学部学生の47.6%が実践していると回答しています。

「かなりしている」と「ある程度している」を合わせると、学部別では、「国際地域創造学部」が55.3%と最も高く、次いで「医学部」が53.1%、「農学部」が50.8%と続きます。「まったくしていない」は「工学部」の15.3%です。全体的に学部間では僅差の結果です。

学部学生

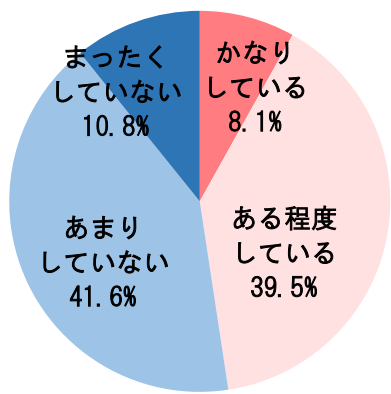


図39 SDGsの課題解決のための取組み

		n	SDGsの課題解決のための取組み (%)			
			かなりしている	ある程度している	あまりしていない	まったくしていない
	全体	3,553	8.1	39.5	41.6	10.8
学部	人文社会学部	506	7.9	34.0	46.4	11.7
	国際地域創造学部	825	9.0	46.3	37.5	7.3
	教育学部	371	7.3	41.8	43.7	7.3
	理学部	439	9.1	38.0	39.6	13.2
	医学部	207	5.3	47.8	37.7	9.2
	工学部	873	7.0	33.9	43.8	15.3
	農学部	307	10.7	40.1	41.4	7.8
	法文学部	23	8.7	34.8	43.5	13.0
	観光産業科学部	2	-	-	100.0	-
	学年	一年生	1,234	8.8	43.2	39.6
二年生		877	7.8	36.7	45.3	10.3
三年生		688	6.7	37.4	40.7	15.3
四年生		754	8.8	38.5	41.5	11.3

表2 学部/学年別 SDGsの課題解決のための取組み

●設問：同僚、家族や友人などとSDGsについて意見を交わす

同僚、家族や友人などとSDGsについて意見を交わすことについて、学部学生では「実践している」が3割、「あまりしていない」が4割弱となっています。

学部別では、「医学部」が「ある程度している」（30.8%）と他学部よりやや高いものの、全体的に僅差の状況です。

学部学生は、学内だけの課題に留まらず、日常生活でも小さなことから実施できることを、講義や課外活動等の機会を通じて身近にアクセスできることが重要と思われます。

学部学生

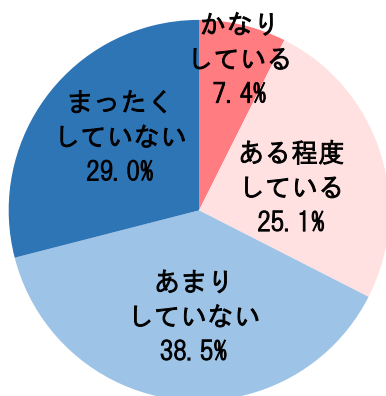


図40 同僚、家族や友人などとのSDGsについての意見交換

	n	同僚、家族や友人などとのSDGsについての意見交換 (%)				
		かなりしている	ある程度している	あまりしていない	まったくしていない	
全体	3,550	7.4	25.1	38.5	29.0	
学部	人文社会学部	504	7.3	19.6	41.9	31.2
	国際地域創造学部	826	7.7	29.3	38.1	24.8
	教育学部	368	6.0	29.3	38.3	26.4
	理学部	441	8.4	22.4	37.4	31.7
	医学部	208	7.7	30.8	34.6	26.9
	工学部	872	6.4	21.6	37.7	34.3
	農学部	306	9.5	27.5	39.9	23.2
	法文学部	23	4.3	30.4	43.5	21.7
	観光産業科学部	2	-	-	100.0	-
学年	一年生	1,230	7.6	28.0	39.5	24.9
	二年生	880	7.5	22.5	38.0	32.0
	三年生	688	6.1	23.1	39.0	31.8
	四年生	752	8.1	25.1	37.1	29.7

表3 学部/学年別同僚、家族や友人などとのSDGsについての意見交換

●設問：SDGsのゴールに合わせた自身の取組みの紐づけ

自身の取組みの紐づけについては、学部学生で「実践している」が約4割です。

学部別では、「農学部」の「かなりしている」が10.7%と高く、「かなりしている」+「ある程度している」を合わせると「国際地域創造学部」が49.5%で高くなります。全体としては僅差の状況です。

学部学生

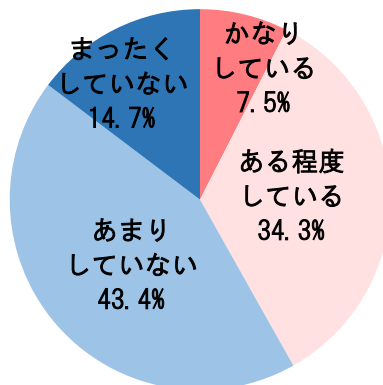


図41 SDGsのゴールに合わせた自身の取組みの紐づけ

		n	SDGsのゴールと自身の取組みの関連づけ (%)			
			かなりしている	ある程度している	あまりしていない	まったくしていない
	全体	3,556	7.5	34.3	43.4	14.7
学部	人文社会学部	507	7.7	28.8	46.0	17.6
	国際地域創造学部	826	8.0	41.5	40.4	10.0
	教育学部	371	7.0	35.0	46.1	11.9
	理学部	441	8.6	31.5	42.2	17.7
	医学部	207	4.8	38.6	44.0	12.6
	工学部	871	6.1	30.5	44.3	19.1
	農学部	308	10.7	35.7	42.5	11.0
	法文学部	23	8.7	30.4	43.5	17.4
	観光産業科学部	2	-	-	100.0	-
学年	一年生	1,232	7.0	35.7	42.1	15.2
	二年生	881	8.1	33.8	44.6	13.5
	三年生	687	7.1	32.5	44.1	16.3
	四年生	756	8.1	34.4	43.5	14.0

表4 学部別 SDGsのゴールに合わせた自身の取組みの紐づけ

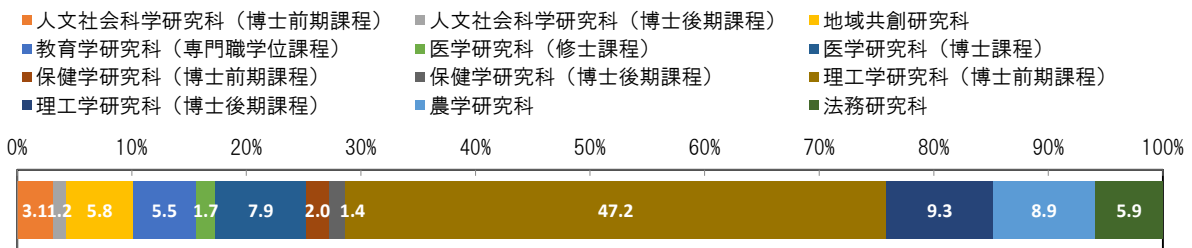
回答者の基本属性

大学院学生

大学院学生について

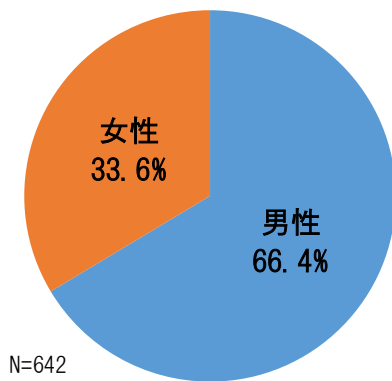
大学院学生の属性

【研究科】



N=642

【性別】



N=642

SDGs の理解度

大学院学生

SDGs の理解度は 8 割と高い

● 設問 : SDGs の理解度

SDGs の理解度は、大学院学生は「内容を理解している」が 82.0%と高い割合です。

研究科別では、人文社会科学研究科が「内容をよく理解している」が最も高く、一方「教育学研究科」が「内容をよく理解している」が 5.7%で最も低い割合となります。

大学院学生では、研究領域が細分化されやすい特徴もありますが、大きな視点で見ると SDGs の目標とリンクしている場合がほとんどであり、SDGs と研究の取組みの関連性についての事例やセミナーなどによって周知できるものと思われます。

大学院学生

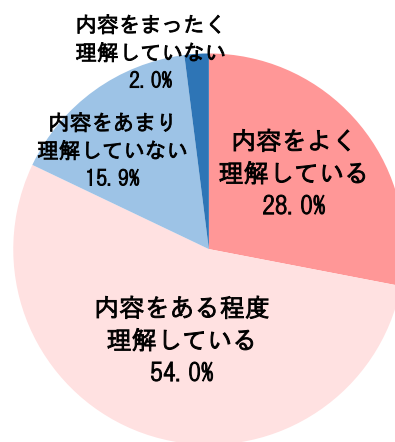


図42 SDGs（持続可能な開発目標）の理解度

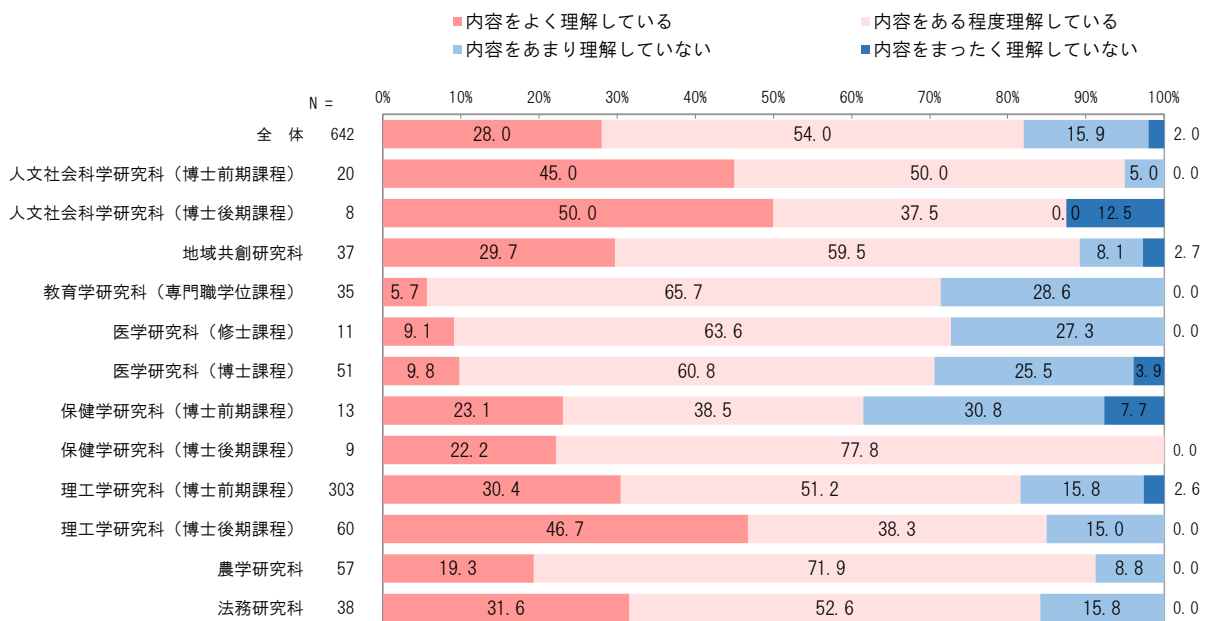


図43 研究科別 SDGs（持続可能な開発目標）の理解度

●設問：SDGsの理解度×SDGsの課題解決のための取組み

大学院学生では、内容の理解度と取組みの度合は相関した結果となります。「内容を理解している」が69.4%の取組みに対して「内容をある程度理解している」が6.6%と62.8ポイントの開きがあるため、SDGsのさらなる理解の機会を提供することで、SDGsがよく理解され「取組み」の程度に変化が出ることが想定されます。

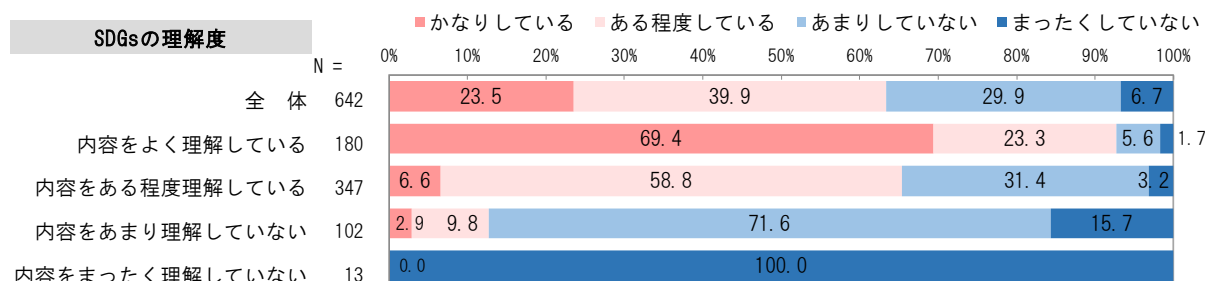


図44 SDGsの理解度×SDGsの課題解決のための取組み

●設問：SDGsの理解度×SDGsのゴールと自身の取組みの関連づけ

大学院学生では、内容の理解度と取組みの度合は相関した結果となります。「まったくしていない」割合は、SDGsの課題解決のための取組みの設問よりもやや増加傾向にあります。

学内や日常生活においてSDGsの掲げている目標とターゲットの多くに関わりがあります。セミナーや取組事例の周知を図ることで、自身の生活と紐づいているという発見があると思われます。

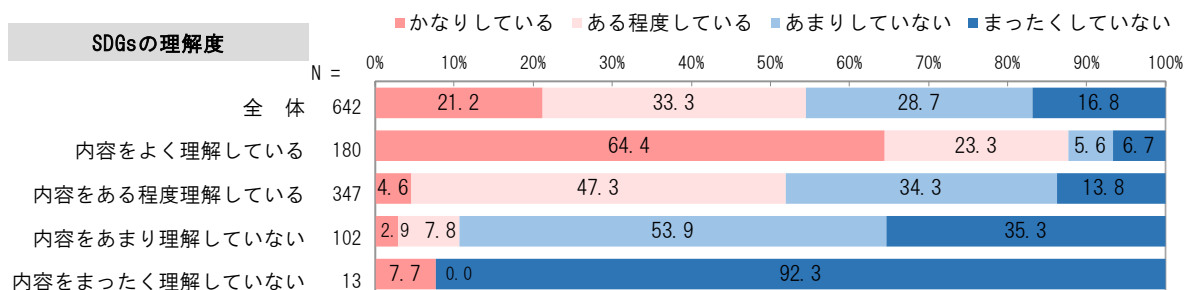


図45 SDGsの理解度×SDGsのゴールと自身の取組みの関連づけ

課題解決の取組み

大学院学生

課題解決に向けた取組みは 6 割以上の実践

● 設問：SDGs 理解のための情報収集・学習の取組み

大学院学生では、情報収集・学習の取組みを 66.6%がしています。

研究科別では「理工学研究科（博士後期課程）」が 48.3%と最も高い取組みとなり、「理工学研究科（博士前期課程）」で 30.7%と理系が上位に続きます。

研究領域がより細分化されグローバルに進出できる分野につき、SDGs の目標は先進国や発展途上国の技術移転等になじみやすい理系の特徴が現れていると考えられます。

大学院学生

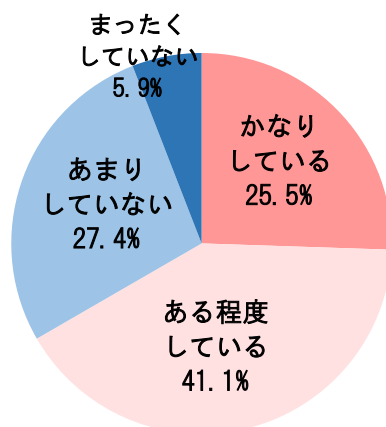


図46 SDGs 理解のための情報収集・学習の取組み

	n	SDGs理解のための情報収集・学習 (%)				
		かなりしている	ある程度している	あまりしていない	まったくしていない	
全体	642	25.5	41.1	27.4	5.9	
研究科	人文社会科学研究科(博士前期課程)	20	20.0	45.0	35.0	-
	人文社会科学研究科(博士後期課程)	8	25.0	37.5	25.0	12.5
	地域共創研究科	37	21.6	54.1	21.6	2.7
	教育学研究科(専門職学位課程)	35	2.9	45.7	51.4	-
	医学研究科(修士課程)	11	9.1	45.5	45.5	-
	医学研究科(博士課程)	51	11.8	35.3	41.2	11.8
	保健学研究科(博士前期課程)	13	23.1	15.4	46.2	15.4
	保健学研究科(博士後期課程)	9	22.2	66.7	11.1	-
	理工学研究科(博士前期課程)	303	30.7	36.3	25.1	7.9
	理工学研究科(博士後期課程)	60	48.3	36.7	11.7	3.3
	農学研究科	57	12.3	63.2	22.8	1.8
	法務研究科	38	21.1	44.7	31.6	2.6

表5 研究科別 SDGs 理解のための情報収集・学習の取組み

●設問：SDGsの課題解決のための取組み

大学院学生では、SDGsの課題解決のための取組みを63.4%がしています。

研究科別では「理工学研究科（博士後期課程）」が41.7%と最も高い取組みとなり、「理工学研究科（博士前期課程）」で28.4%と理系が上位に続きます。

研究科では、グローバルな課題解決に貢献するべく、高度で多様な研究が進められていることがうかがえます。

大学院学生

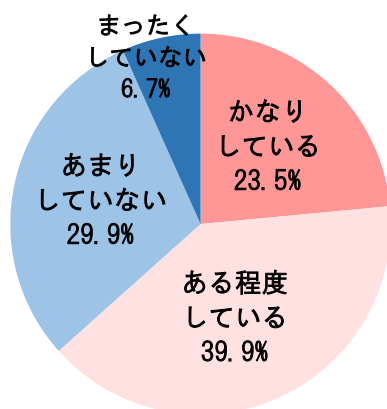


図47 SDGsの課題解決のための取組み

	n	SDGsの課題解決のための取組み (%)				
		かなりしている	ある程度している	あまりしていない	まったくしていない	
全体	642	23.5	39.9	29.9	6.7	
研究科	人文社会科学研究科(博士前期課程)	20	15.0	40.0	45.0	-
	人文社会科学研究科(博士後期課程)	8	25.0	50.0	12.5	12.5
	地域共創研究科	37	24.3	43.2	27.0	5.4
	教育学研究科(専門職学位課程)	35	-	51.4	48.6	-
	医学研究科(修士課程)	11	9.1	45.5	45.5	-
	医学研究科(博士課程)	51	7.8	39.2	39.2	13.7
	保健学研究科(博士前期課程)	13	23.1	23.1	46.2	7.7
	保健学研究科(博士後期課程)	9	22.2	66.7	11.1	-
	理工学研究科(博士前期課程)	303	28.4	37.6	26.1	7.9
	理工学研究科(博士後期課程)	60	41.7	31.7	20.0	6.7
	農学研究科	57	10.5	54.4	31.6	3.5
	法務研究科	38	26.3	31.6	36.8	5.3

表6 研究科別 SDGsの課題解決のための取組み

● 設問：同僚、家族や友人などと SDGs について意見を交わす

大学院学生では、SDGs についての意見交換を 65.0%が実践しています。

研究科別では「理工学研究科（博士後期課程）」が 51.7%と最も高い実践となり、「理工学研究科（博士前期課程）」で 31.0%と理系が上位に続きます。

研究科の研究内容によって、SDGs と関連しやすい研究科が上位になっています。他研究科でも、日常生活でも気軽に SDGs に関する話題について話しやすい雰囲気やその意義を知ることが重要であると考えます。

大学院学生

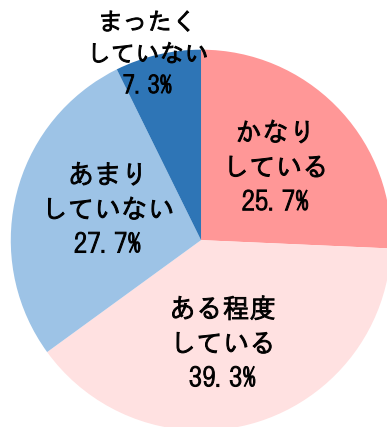


図48 同僚、家族や友人などとの SDGs についての意見交換

		n	同僚、家族や友人などとのSDGsについての意見交換 (%)			
			かなりしている	ある程度している	あまりしていない	まったくしていない
全体		642	25.7	39.3	27.7	7.3
研究科	人文社会科学研究科(博士前期課程)	20	15.0	45.0	35.0	5.0
	人文社会科学研究科(博士後期課程)	8	25.0	62.5	-	12.5
	地域共創研究科	37	29.7	29.7	32.4	8.1
	教育学研究科(専門職学位課程)	35	2.9	48.6	48.6	-
	医学研究科(修士課程)	11	9.1	36.4	54.5	-
	医学研究科(博士課程)	51	5.9	37.3	43.1	13.7
	保健学研究科(博士前期課程)	13	15.4	38.5	38.5	7.7
	保健学研究科(博士後期課程)	9	22.2	77.8	-	-
	理工学研究科(博士前期課程)	303	31.0	36.3	23.8	8.9
	理工学研究科(博士後期課程)	60	51.7	26.7	15.0	6.7
	農学研究科	57	12.3	56.1	26.3	5.3
	法務研究科	38	21.1	44.7	34.2	-

表7 研究科別同僚、家族や友人などとの SDGs についての意見交換

● 設問：SDGsのゴールに合わせた自身の取組みの紐づけ

大学院学生では、自身の取組みの紐づけは54.5%が実践しています。

研究科別では「理工学研究科（博士後期課程）」が35.0%と最も高い実践となり、「理工学研究科（博士前期課程）」で26.7%と理系が上位に続きます。

大学院学生

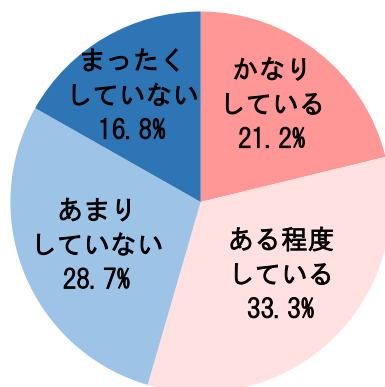


図49 SDGsのゴールに合わせた自身の取組みの紐づけ

	n	SDGsのゴールと自身の取組みの関連づけ (%)				
		かなりしている	ある程度している	あまりしていない	まったくしていない	
全体	642	21.2	33.3	28.7	16.8	
研究科	人文社会科学研究科(博士前期課程)	20	25.0	30.0	35.0	10.0
	人文社会科学研究科(博士後期課程)	8	12.5	50.0	25.0	12.5
	地域共創研究科	37	13.5	40.5	21.6	24.3
	教育学研究科(専門職学位課程)	35	5.7	34.3	51.4	8.6
	医学研究科(修士課程)	11	9.1	45.5	36.4	9.1
	医学研究科(博士課程)	51	9.8	25.5	51.0	13.7
	保健学研究科(博士前期課程)	13	7.7	30.8	38.5	23.1
	保健学研究科(博士後期課程)	9	11.1	55.6	22.2	11.1
	理工学研究科(博士前期課程)	303	26.7	33.0	21.1	19.1
	理工学研究科(博士後期課程)	60	35.0	36.7	13.3	15.0
	農学研究科	57	10.5	33.3	42.1	14.0
	法務研究科	38	18.4	23.7	42.1	15.8

表8 研究科別 SDGsのゴールに合わせた自身の取組みの紐づけ

ま と め

持続可能な開発目標（SDGs : Sustainable Development Goals）は、2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。

世界一丸となって、「誰一人取り残さない」の方針のもとに、17のゴールと169のターゲットを設定しています。

本学においては、「琉球大学憲章」を2007年に制定し、その基本理念に基づき、持続可能な地域社会の発展に向けた行動を推進してきました。

その後、SDGsに関連する国内外における様々な状況を踏まえ、2019年6月27日に「琉球大学におけるSDGsへの取組みについて」として、学長メッセージを本学公式ホームページへ掲載し、SDGsに関する取組みの方向性が示されました。

さらに、SDGsへの取組みを本格的に推進するため、2020年2月、SDGs推進室を設置し、SDGs推進室の中に置かれた「教育」、「研究」、「社会貢献」及び「業務・ガバナンス」の4つのワーキンググループを中心にSDGsに関連する取組みを展開するとともに、2022年2月には、SDGs推進室の4つのWG等が相互に連携し、本学におけるカーボンニュートラルに関する取組みを推進することを目的として、「カーボンニュートラル推進チーム」を設置し、取組実施に向けた議論をスタートさせています。

本推進室の取組みの一つとして、教職員及び学生のSDGs意識啓発に向けた課題の把握と今後のSDGsの取組改善に資するため、SDGsに係るアンケートを実施しました。教職員は3回目、学生については今回が初の実施となります。

SDGsの理解度は、前回(令和2年度)実施のアンケートと比較し、教員はほぼ同程度の割合ですが、職員は約18%上昇しています。

これは、本学におけるSDGsに関する様々な取組みにより、職員の理解度が高まりつつあることがうかがえます。

また、学部学生及び大学院学生については、約8割が「内容を理解している」との結果が出ていることから、SDGs関連科目の提供等の取組みが学生の高い理解度に繋がっていると思われます。一方で、毎年新入生を受け入れ、本学の新たな構成員となるため、継続的に学生の理解度を高める工夫が求められます。

今回のアンケート結果を踏まえ、今後も本学構成員のSDGsに関する理解度の向上・SDGsに係る取組みの改善を目指し、学内外のステークホルダーとの連携・協働による様々な取組みを推進していきます。

令和4年度 琉球大学
SDGsに関する教職員・学生アンケート調査報告書
令和5年3月

発行：琉球大学 SDGs 推進室

所在地：〒903-0213 沖縄県西原町千原1番地

電話：098-895-8024 (ダイヤルイン)

FAX：098-895-8185

ウェブサイト：<https://sdgs.skr.u-ryukyu.ac.jp/>